

豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ

賀茂

豊橋校区史

5

Kamo







豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ 賀 茂



照山と照山城跡

思い出の川



神心古墳



行者心
古墳出土高坏



賀茂神社本殿

徳川家康公
奉納大旗



競馬





県指定文化財猿田彦の面



市指定文化財能面

発刊によせて



平成18年度
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業にすばらしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思えます。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げます、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度
賀茂校区史編集委員長

山 本 瑳 一

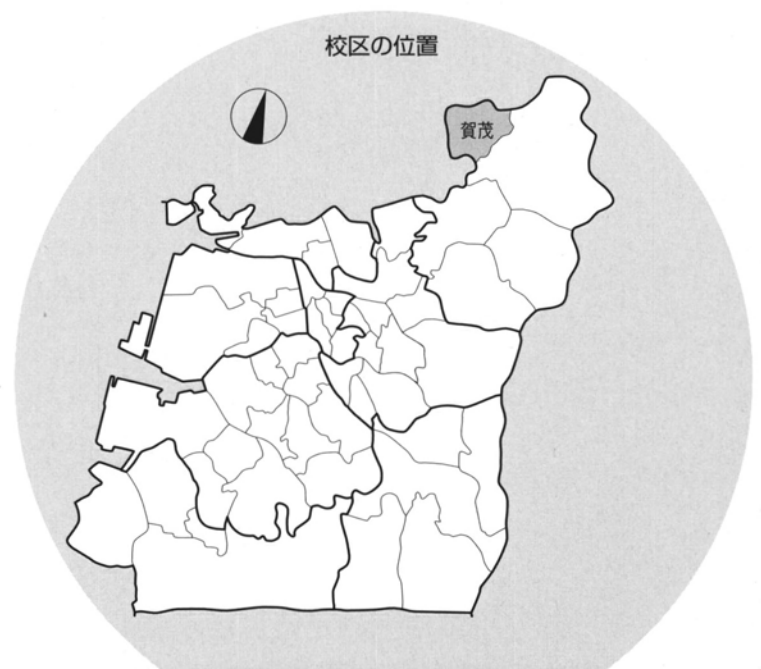
私たちの賀茂は、豊橋の最北端の町であり、賀茂しょうぶ園のある町として、周知されています。また昔から田園に囲まれ、自然の豊かな静かな町でもあります。しかし歴史をひもとけば、実に多くの史実があります。

賀茂神社の裏あたりから縄文式土器、神社前の広い田園からは多くの弥生式土器が出土します。そして、賀茂の土地改良（耕地整理）がなされる以前には、大化の改新の頃からの条里制の跡が整然と残っていました。また、賀茂神社勧請にまつわる源頼朝、戦国時代の軍師山本勘助の出生地、徳川家康と賀茂神社の伝説、賀茂神社の朱印100石の事実など、わが賀茂には日本歴史上関係することが実に多くあります。近代に至っては、賀茂の人々を救った大恩人竹尾彦九郎の活躍に思いを致します時、これらのことは賀茂の誇りでもあり、また私たちの財産といっても過言ではないでしょう。

私たちは先祖の残したこれらの歴史や文化を継承し、新たな文化を創造して郷土賀茂の発展に寄与しなくてはならないと考えます。

ここに「校区のあゆみ賀茂」を発刊するにあたり、賀茂の皆さんが賀茂の財産である歴史の上に立って、更に新しい賀茂を創造すべく奮起し努力されますことをご期待申し上げます、ごあいさつといたします。

第1章 自然と環境		2 賀茂小学校	35
1 土地のようす	7	(1) ゆりかごの時代	35
(1) 位置と面積	7	(2) 基礎が確立した時代	36
(2) 地質	7	(3) 内容が充実した時代	37
(3) 地名の由来	7	(4) 戦時下の教育の時代	37
2 気候のようす	7	(5) 教育復興の時代	38
(1) 気候	7	(6) 充実とゆとりの時代	39
(2) 風土	8	3 双和中学校	39
3 交通の移り変わり	10	4 賀茂保育園	41
(1) 「賀茂の渡し」から「賀茂橋」へ	10	(1) 保育園の建設と改築のあゆみ	41
(2) 「舟運」から「自動車」へ	10	(2) 保育園の内容を深める努力	41
(3) 賀茂校区の変遷地図	12	(3) 保育園と家庭・地域を結ぶ努力	42
第2章 歴史と生活	16	5 史跡と文化財	42
1 賀茂校区の歴史	16	(1) 賀茂神社の文化財	42
(1) 原始時代	16	(2) 春の例祭に関する神事と行事	42
(2) 古代から中世へ	17	(3) 史跡と文化遺産	43
(3) 江戸時代の賀茂	18	6 賀茂輩出の人物	44
(4) 明治になって	19	(1) 山本勘助	44
(5) 大正時代の賀茂	21	(2) 竹尾彦九郎	45
(6) 太平洋戦争中の暮らし	21	(3) 戸塚環海	47
(7) 新しい憲法のもとで	22	賀茂校区史関係略年表	48
(8) 安全で住み良い町、賀茂へ	23	参考文献	51
2 産業の移り変わり	25	編集後記	52
(1) 農業	25		
(2) 商業	26		
(3) サービス業	27		
(4) 工業	28		
3 総代会と校区の活動	30		
(1) 校区の概要	30		
(2) 総代会の構成と主な活動	30		
(3) 校区の活動	31		
第3章 教育と文化	35		
1 寺子屋教育	35		



第1章 自然と環境

1 土地のようす

(1) 位置と面積

豊橋の最北端 私たちの住む校区は、市内の最北端に位置している。のどかな田園地帯が豊川に抱かれている地形で、東名高速道路が町内北部を走り、今は採掘により景観を変えつつある照山と、名高い「賀茂しょうぶ園」を擁するところである。

中心部にある賀茂小学校の位置

東経	137度25分48秒
北緯	34度49分29秒
海拔	11.9m



賀茂小学校の標識

賀茂町の面積と距離

面積	約4.27km ²
距離	東西 2.7 km
	南北 2.4 km

(2) 地質

賀茂町 は豊川左岸に位置し、赤石山脈の末

端の一部の照山と、その南側の洪積台地、さらに南に広がる沖積層から成っている。中央構造線の南東側に位置する基盤岩は西南日本外帯に分布する三波川変成帯と秩父帯の岩石によって構成されている。新城市南部から豊橋市北部に分布する三波川変成帯の緑っぽい岩石は、各所で採掘の対象となっている。採掘の続く照山の岩石も多方面から発注をうけ、当地の有力な地下資源として注目されている。ここの岩石の特性は、硬質であるが割れやすくしかも粉末になりにくい点である。これらの基盤岩を覆う礫・砂・粘土からなる堆積層は、賀茂神社のある洪積台地をなし、町内の平地は、沖積微高地（砂礫自然堤防）を形成している。

(3) 地名の由来

賀茂の地名の由来 私達の氏神賀茂神社は、賀茂別雷命かもわけいかづちのみことを祭神として、聖武天皇の天平元年（729）に山城国（京都）より勧請したと伝えられている。この神領に住む人々が氏神として賀茂神社を祭るようになった頃から、「賀茂」と呼ぶようになったと思われる。

2 気候のようす

(1) 気候

比較的温暖 降水量にもかなり恵まれ、年間を通して快晴の日が多く、特に冬季には晴天が続き、降雪、降霜も少なく農業にはかなり好条件をそなえている。ただ、冬は「三河の空っ風」の異名をもつ北西の風が強い。

(2) 風土

とよがわと霞堤 賀茂町の北から西へ、そして南にかけて賀茂を抱くように流れている豊川は、江戸時代には吉田川と呼ばれていた。

豊川の川幅はさほど広くはないが、上流の山は深く、昔から水量が豊富である。しかも流路が短く急勾配のため急に増水した時や加えて満潮と重なった場合の水害には大変悩まされた。ときには堤防が切れたり家や田畑が流失したりするなど、大きな被害を生じた。

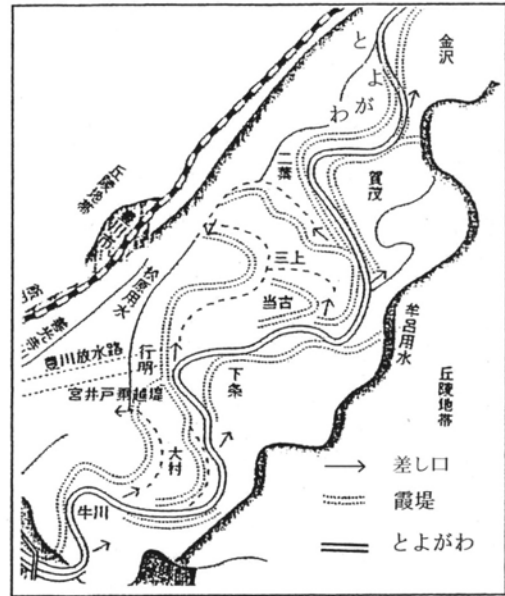
このような災害を防ぐためと、吉田川口にある吉田の町（豊橋）と吉田城を守る方法について当時の人々はいろいろ考えた。こうして考案したのが霞堤または鑊堤よろいていと呼ばれる堤防である。

それは吉田川の堤防のところどころに、「差し口」という切れ目を作り、川が増水するとその「差し口」より、堤防外の田畑や部落などが出来ている少し高い土地（ここに住む人々は盛土をして家を建てた）、または旧河道きやうかどうに残る古堤防に囲まれた田畑（遊水地）に水を逆流させた（これを「差し水」と呼ぶ）。これは水勢を削ぐためと堤防の切れるのを防ぐとともに洪水によるよく肥えた泥土を厚く積み重ね、作物がよくとれるようにする目的もあった。

さて、私達の賀茂町にも霞堤があった。それはいまの照山採石場の少し南の大照山についたところから、現在の堤防に沿って本願寺の西をまわり豊川に沿って南に向きを変え、賀茂橋のたもとを経て豊川市三上町勝山の手前にある六盃橋までである。霞堤といわれるように六盃橋の手前では1 m程の高さになり遂に消失してしまう。

つまり霞のように消えてなくなるのである。霞堤の名残りとしては、村上の霞堤のはじまるところから数百mと、賀茂橋のすぐ下流と、間川が豊川に合流するところで切れている高

い堤防の左手に、昔作られた霞堤の末端を見ることができる。いまでも豊川が増水すると、この切れ目から差し水となって賀茂町に浸入して来る。そして三上の地を経て賀茂の田畑や家々の床下までも浸水して来ることが間々ある。



霞堤略図

豊川放水路が完成する前には、賀茂は毎年数回の洪水に見舞われ、城前・栗八名部落など床上浸水の家が多く見られた。

村上の霞堤には水神様が2か所祭ってありその間は約600mある。これは明治37年(1904)7月10日の大暴風雨により決壊した区間である。この時から言い伝えられてきたことに次のようなことがある。

当時、賀茂小学校の裏の田は全て河原と化し、村人総出でもっこを使って石を運び出し、元の田に復原したのだった。その時の水位は約11mの高さで、水は定重・城前・栗八名の部落をまともに襲い次のような話が残っている。

- ① 城前公会堂の近くの家では、飼い馬を床の上に上げたところ、首だけが水面から出ているほどの水量だったという。

② 当時は殆ど草ぶきの家だったので、多くの家が流された。村上の堤防が決壊し、濁流がものすごい勢いで部落の中へ流れ込んだ。風はだいぶやわらいだが、雨はまだ止まない。草ぶきの屋根裏に避難した親子3人は、増水により高くなる水位に追われ、とうとう草屋根の内から穴を空け棟の上に登った。家は水勢によってゆれ動き、間もなく流れ出す状態となった。

このままでは3人とも助からないと思った父親は、かねて用意していた馬を洗う大きな桶を取り出して浮かべ、3才の1人息子を乗せて流してやることにした。

「お前はこの桶の真中に座れ。決して動くではないぞ。立ってもいけない。そのうちに誰かが助けてくれるだろう。」

何度も言って聞かせ、ものすごい勢いで流れる泥水の中へ流してやった。桶が1軒の家の側を流れるとき、その家の棟の上にいた男の人が、「坊や、今助けてやるぞ。」と叫んだ。すると子どもは喜び、両手を上げて桶の中で立った。その瞬間桶はひっくり返り、子どもの姿は2度と見る事ができなかったという。

③ 賀茂の北西の豊川の対岸に、宝飯郡一宮町橋尾の部落がある。この部落は江戸時代には毎年何度も堤防が決壊した。

その原因は部落が川の曲がる場所に位置していることと、当時の堤防は現在の堤防の3分の1の高さだったからである。

江戸時代には次のようなことわざがあった。「下条七村賀茂八村、牟呂にゃかなわぬ九村。」この賀茂八村というのは、当時賀茂村には八つの部落があるということである。つまり、坂井・照山・定重・城前・栗八名・鶴巻の6部落の他に、今の豊川市向河原町と宝飯郡一宮町井の嶋が入っていた。ずい分昔から村の境界線として川が利

用されていたため、その昔向河原と井の嶋は豊川の賀茂側にあったことを示しているのである。

なお、これも霞堤の出来る前の豊川の蛇行の一例であるが、約400年前の豊川は、今の栗八名川に沿って流れていた。その頃の言い伝えであるが、照山に住む筏師いかだしの妻が、照山の下を通過する夫の筏を見て急ぎ御飯を焼き、今の辻村牧場の北側まで弁当を届けた由である。

これらの話は、豊川がよく氾らんしては蛇行を繰り返し、賀茂の人々の難儀をほのめかず語り草といえよう。



草ぶきの昔の家

また、それと共に洪水に対する生活の智慧も働かした。

一例として上の写真からも見ることのできる家の周囲を、葉の密度の高いこの地方で言うホソバ（細葉 [イヌマキ]) の屋敷林で囲むことである。

豊川下流域は冬季に北西風が強く吹くため防風林の役割もあったが、屋敷林は北西部分だけに配置されたわけではなく、屋敷の周囲を囲んでいる場合が多い。

これは洪水時に外部からゴミなど流水物が屋敷内に入らない工夫でもあったが、同時に家の中の家財が外へ流出しない工夫でもあった。

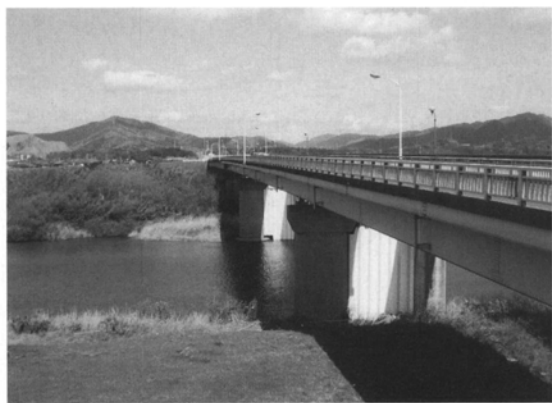
3 交通の移り変わり

(1) 「賀茂の渡し」から「賀茂橋」へ

秋葉山道 かつて豊川沿いの賀茂には、豊川稲荷・秋葉神社・半僧坊へ通じる秋葉山道など（豊川稲荷道・半僧坊道とも呼ばれた）宗教上重要な参詣道が東西に走っていたが、遠州から来る旅人は弓張山系の宇利峠で難渋し、さらに、豊川で足を止められるというありさまであった。この秋葉山道を遮る豊川をつないでいたのが賀茂の渡船である。

初めは民営で、渡船料を取って客を渡していたが、大正6年に県営となり、無料で乗れるようになった。渡船は、夜明けから日没の暗くなる頃まで運行するのが普通で、増水すると運行停止になった。緊急の時など、夜中でも船頭を起こして、船をださせたという。こうした不便な状態を一刻も早く解決することが豊川両岸住民の悲願であった。

その後地域住民が一丸となり幾多の難題を乗り越えて遂に昭和41年（1966）4月待望の賀茂橋の姿を見ることとなった。



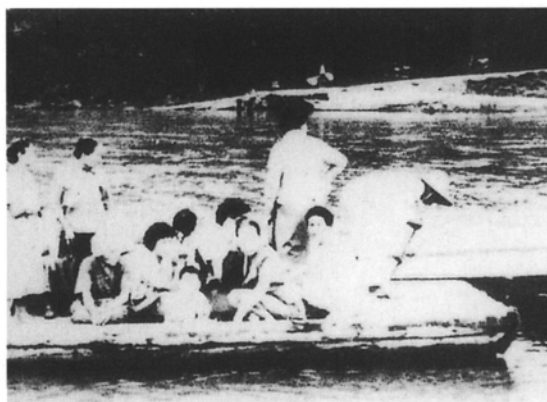
賀茂橋

賀茂の渡し 現在の賀茂橋の少し上流に位置し、向河原の堤防の中ほどの（栈橋より15mほど上った）藪の中に船頭小屋（3～4坪）があった。そこに常駐していた船頭は、人の呼び声や、人の姿を見ては対岸目指して漕ぎ出して行く。そこには舟の発着時刻表はなく、

船頭の自由にまかせた渡船であった。賀茂側の栈橋から船頭小屋までは約70mあった。舟は両岸に立てられた電柱ぐらいの柱の先端にワイヤーロープが張られ固定されていて、このロープに滑車をつけたロープを繋ぎもう一方の先端が舟に繋がれていた。

舟には中央より少し端の所に繋ぎ箇所があり、往復には川の流れが推進力となり、竹竿で少しあしらうと進む仕掛けになっていた。舟の形は矩形で縦6m横1.5m位で（別に洪水用の舳が尖った舟が一艘用意されていた）人の他に乗せる物は荷車、リヤカー、牛馬車、自転車等であった。又一時は船頭の希望者がなく賀茂の住人に船頭当番が回ってきたときもあった。乗るところは、河原から少し水辺に入った所まで幅1.8m程の木の栈橋が作られ舟に乗りやすくなっていた。

朝、夕など多くの通勤、通学者が利用した。特に一宮砥鹿神社の祭礼には着飾った近在の人々でそれこそ満員の状態で運行された。

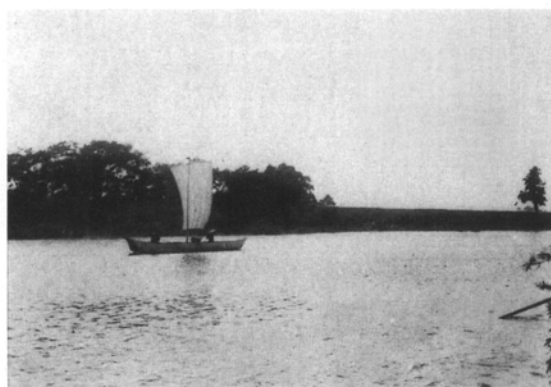


昭和41年の賀茂の渡船

(2) 「舟運」から「自動車」へ

舟運と馬車 豊川を利用し永禄年間（1558～1569年）に始まった豊橋～新城までの舟による物資（塩・綿・木材・年貢米等）の運搬は、江戸時代末期から明治時代前期に著しく発展した。当時豊川筋全体の舟運数は常時100艘ほどであった。賀茂でも賀茂の川筋を行き来

する帆を張った舟を見ることができた。明治30年（1897）代に入り、鉄道の開通を見ることとなり豊川の舟運は衰退の一途をたどった。



豊川の帆掛け船

鉄道の開通 近隣の市町村に鉄道が開通したのは、現在の飯田線の前身である豊川鉄道が明治30年（1897）に開業。33年大海まで全長27.9kmが開通した。当時は豊川稲荷・一宮砥鹿神社参詣者に特によく利用された。

乗合自動車の登場 昭和7～8年（1932～1933）頃に豊橋の人が自分の自動車（今の乗用車）を利用し、おおよその時刻をきめて数回、豊橋の町と賀茂の村を走っていた。停留所も決まっておらず車を見て手を上げるとどこでも止まって乗せてくれた。

乗車定員は今のバスとは違い乗用車なので4～5人だった。

乗合バスの登場 昭和24年9月1日豊橋乗合自動車（株）と合併した豊橋交通（株）（現豊橋鉄道）により豊橋駅前～玉川～金沢間を昭和27年6月26日時点で1日1本運行が開始された。

その後、賀茂バス停通過本数は昭和40年頃の全盛時代に上下各6本が運行され、現在は始発7：30～最終16：36の間で上下各4本が運行されている。

自家用自動車の時代へ 昭和20年代の交通の手段は殆ど自転車中心であった。その後オートバイが利用されるようになり、昭和30年代

後半になり少しずつ自動車の普及を見ることとなる。

そして高度経済成長と共に賀茂橋の完成（昭和41年）東名高速道路の完成（昭和44年）、等道路状況の進展にともない自家用自動車の時代へと大きく変わった。

部落名	戸数	普通車	軽自動車
坂井	32戸	50台	57台
照山	58戸	80台	75台
定重	78戸	111台	96台
鶴巻	80戸	135台	95台
城前	59戸	106台	84台
栗八名	37戸	61台	66台
合計	344戸	543台	473台

平成17年1月現在賀茂校区内の自動車保有台数

部落名	オートバイ	自転車
坂井	20台	58台
照山	15台	93台
定重	23台	150台
鶴巻	24台	194台
城前	21台	138台
栗八名	11台	86台
合計	114台	719台

平成17年1月 各戸アンケート

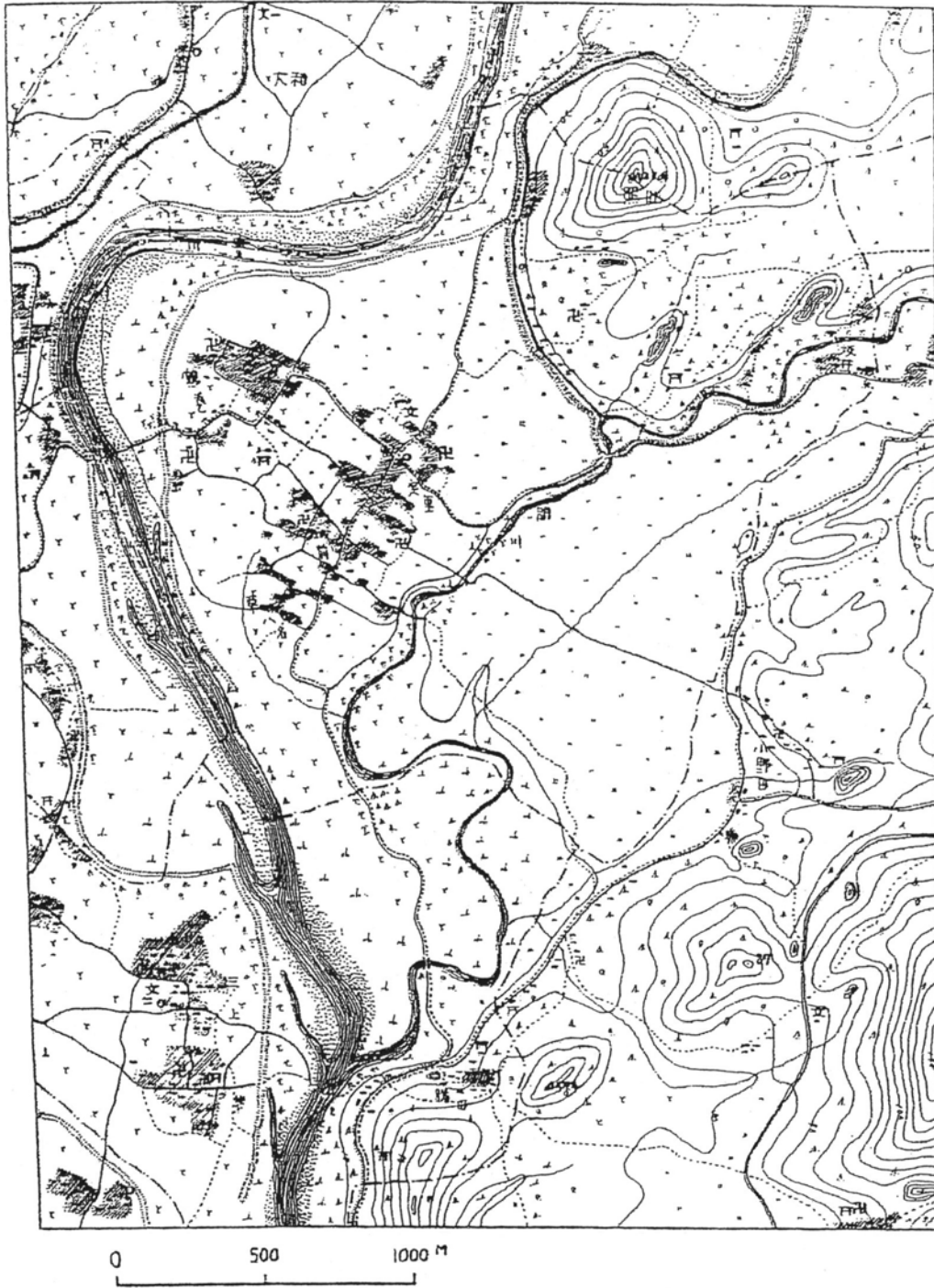
主要道路とチェックバリヤ

国の主要道である東名高速道路が町内を走り、通行券不正使用の唯一つのチェック機能であるチェックバリヤが賀茂町内にある（昭和63年（1988）4月完成）。

(3) 賀茂校区の変遷地図

明治20年（1887）頃の賀茂の地図

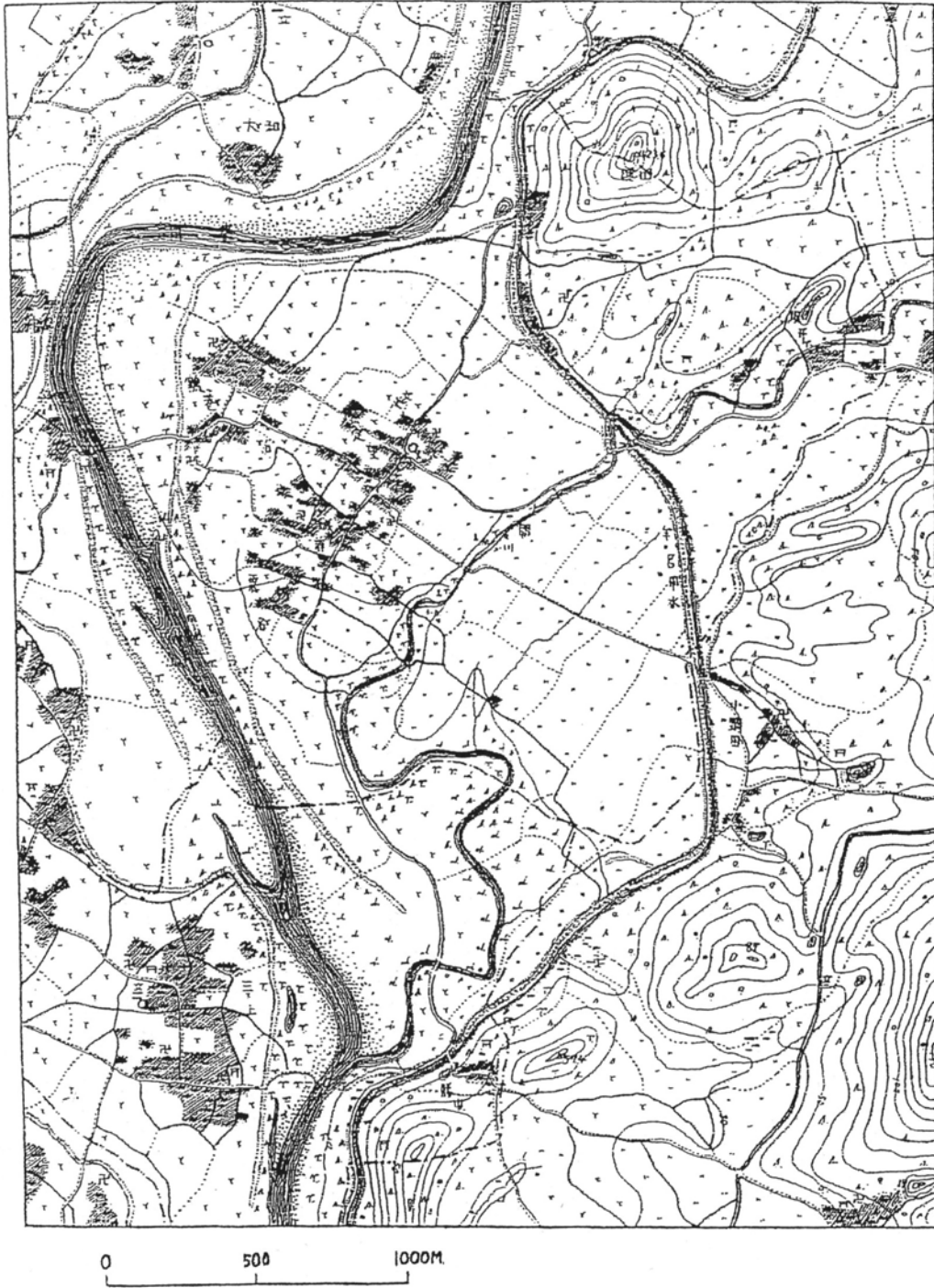
賀茂（1）



白井 覚著「幼きものに」より

大正5年（1916）頃の賀茂の地図

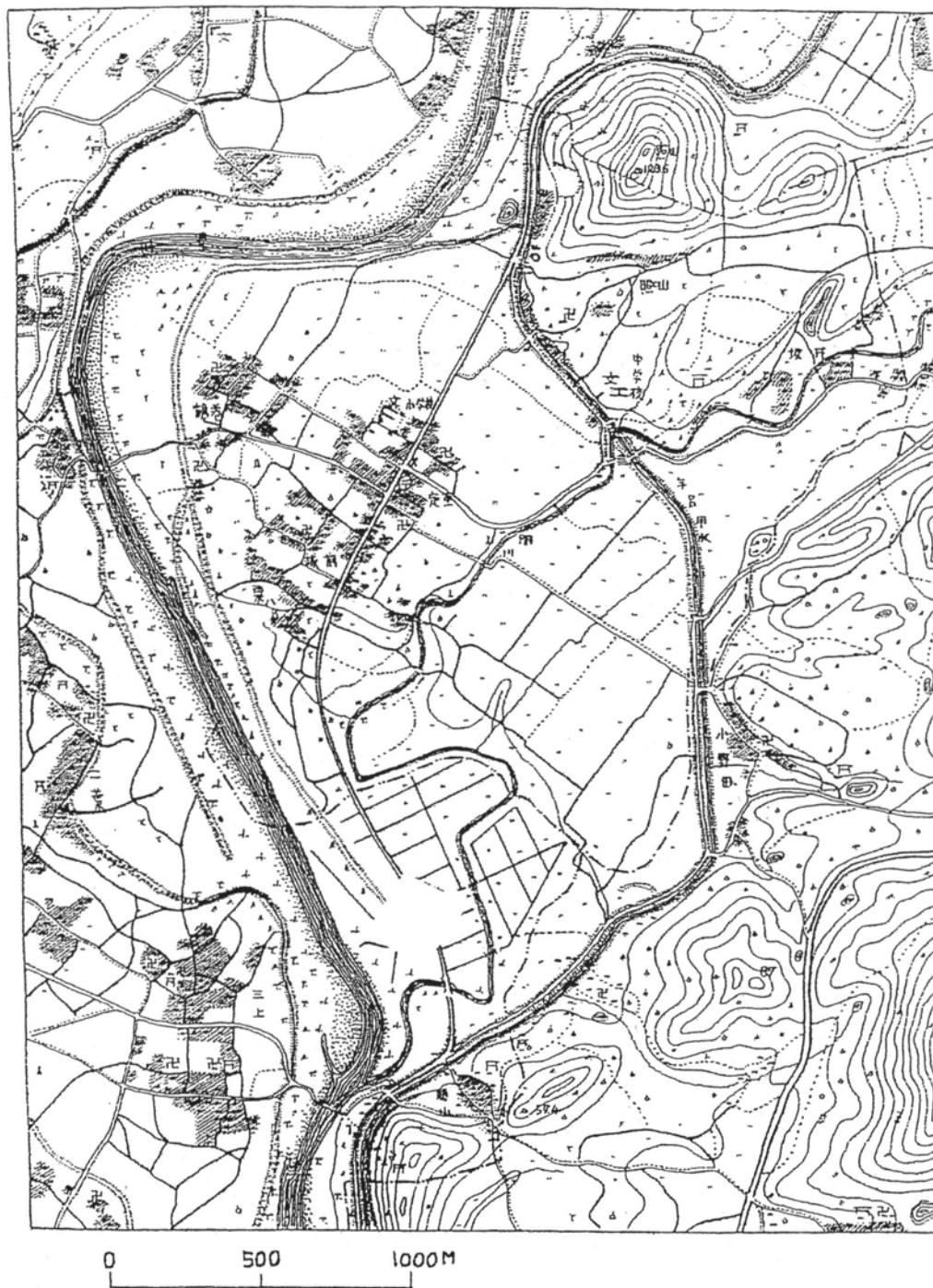
賀茂（2）



白井 覚著「幼きものに」より

昭和30年（1955）頃の賀茂の地図

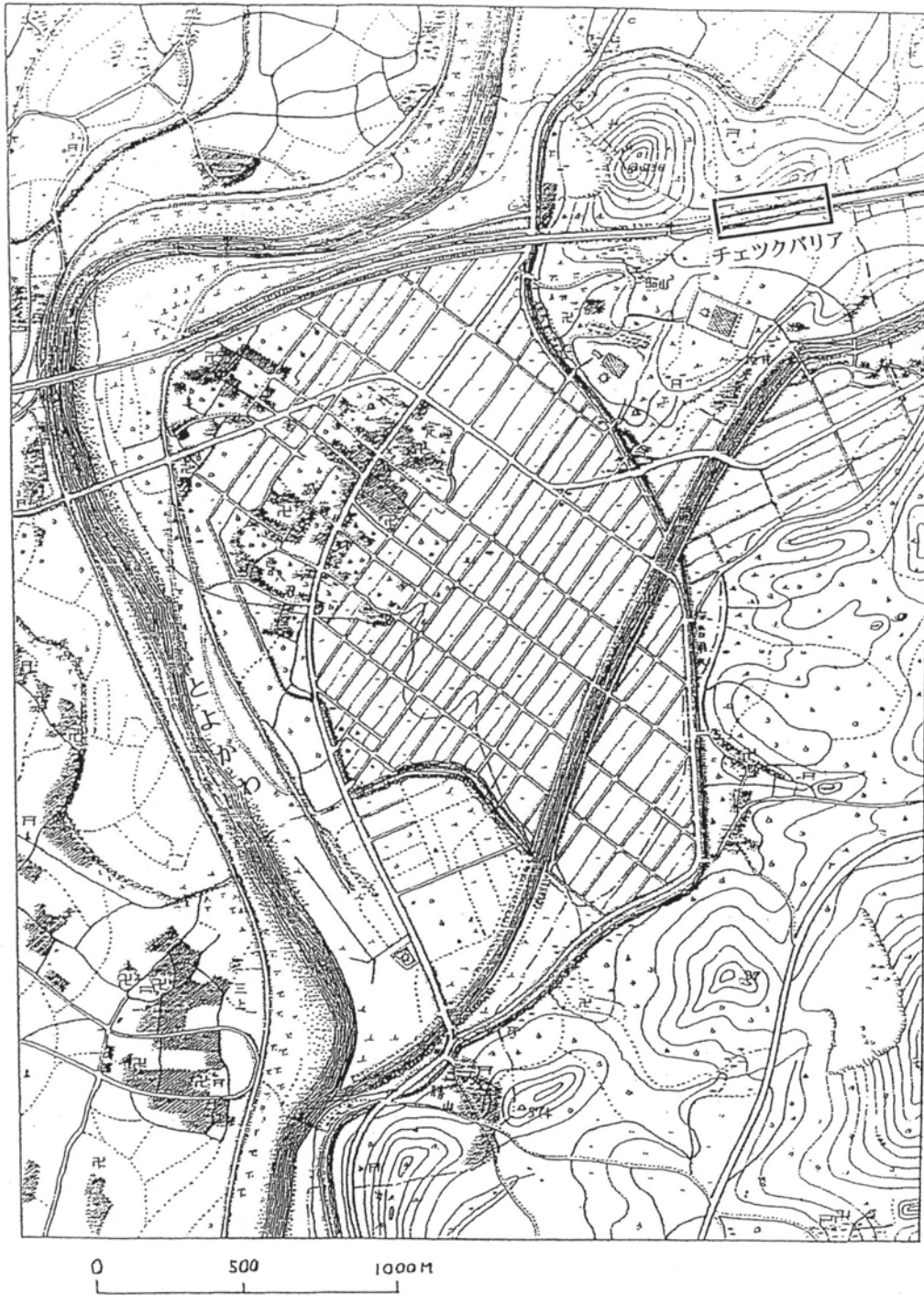
賀茂（3）



白井 覚著「幼きものに」より

昭和51年（1976）頃の賀茂の地図

賀茂（4）



東名高速道路

間川

白井 覚著「幼きものに」より

第2章 歴史と生活

1 賀茂校区の歴史

(1) 原始時代

賀茂に人が住み始めたのは 私たちの住む賀茂町には、いつ頃から人々が住み始めたであろうか。それを解き明かすひとつの方法として、出土する遺物から推測することができる。賀茂町内の遺物分布図を見ると、賀茂神社の裏辺りから坂井部落にかけて、縄文時代の石器・土器が発見されており、また、加納寺の南辺りから、定重・城前・栗八名の東の田にかけて、多くの弥生式土器が出土している。

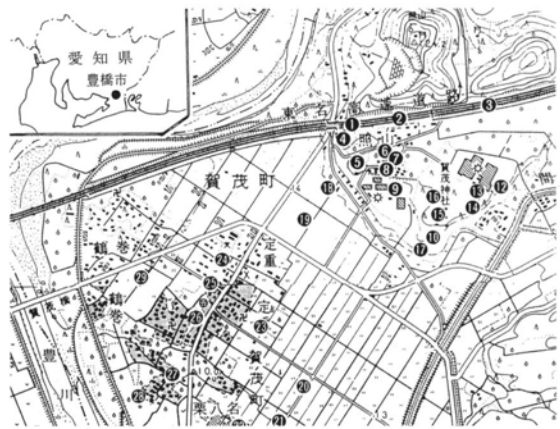
このことは、古墳時代以前、約4百年続いた稲作農業を中心とする弥生時代の生活を示すものである。そして、さらにそれ以前、約1万年も続いた狩猟・漁労を中心とする縄文時代にも、賀茂に人々が生活していた証がある。賀茂には、1万数千年の昔から人々が生活して、人々はムラをつくり、やがて、クニとして統一されていくのである。

賀茂町内の主な遺跡分布 弥生時代に続き、古墳時代がやってくる。古墳が日本各地に造られたのは、大和政権によって、日本が統一された頃からで、約4百年程続いたとされる。

賀茂神社のたいこ橋を渡って、参道を進むと、一の鳥居の右手、杉木立の中に丸く盛り上がった小山がある。これが、賀茂に現存する唯一の古墳「神山古墳」である。古墳は元来、大陸から伝わったもので、支配階級であった豪族たちの力を示すために築いたお墓である。賀茂神社のある台地を賀茂平^{だいら}と呼んでいるが、賀茂平から照山にかけて多くの古墳

があった。古墳は、後世の人々の都合（東名高速道路の建設、牟呂用水の開削、道路建設、学校や住宅建設等）により、取り壊された。

賀茂町内の主な遺跡分布は、次の図の通りである。

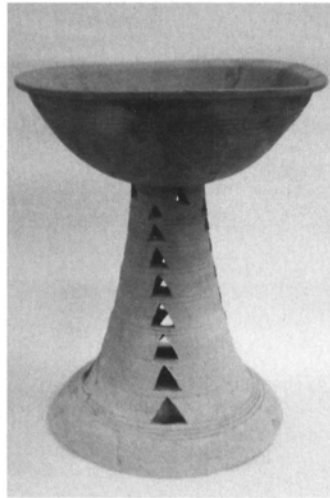


賀茂町内の主な遺跡分布図

番号	遺跡名	時代(墳形)	番号	遺跡名	時代(墳形)
1	行者山古墳	古墳(円墳)	15	賀茂神社遺跡	弥生~江戸
2	照山古墳	古墳(円墳)	16	賀茂神社西遺跡	弥生
3	小照山古墳	古墳(円墳)	17	賀茂神社南遺跡	弥生
4	比丘尼谷古墳	古墳	18	後田遺跡	弥生
5	加納寺古墳	古墳(円墳)	19	双田遺跡	弥生
欠番	三ツ塚古墳	古墳	20	大橋遺跡	弥生
6	丸塚古墳	古墳(円墳)	21	鯉ヶ瀬遺跡	弥生
7	大塚古墳	古墳(円墳)	22	大鳥井下遺跡	弥生・鎌倉
8	塚古墳	古墳(円墳)	23	善心寺遺跡	弥生・鎌倉~江戸
9	弁天(怒り塚)古墳	古墳(竪立貝式後円墳)	24	森信遺跡	鎌倉
10	神山(龍神)古墳	古墳(円墳)	25	恵実遺跡	鎌倉~江戸
11	坂井遺跡	縄文	26	城前遺跡	鎌倉~江戸
12	賀茂神社裏A遺跡	縄文	27	山伏遺跡	鎌倉~江戸
13	賀茂神社裏B遺跡	弥生	28	大蠟遺跡	古墳・鎌倉
14	坂井遺跡	縄文	29	大伴神社遺跡	室町

ちなみに、東三河地方に最初造られた古墳は石巻本町字別所北入田地内にある権現山二号墳の前方後円墳である。

前方後円墳は日本独特の美しい形で、賀茂町内旭精機工場内にも、昭和26年(1951)まであった。



須恵器「行者山古墳の器台」
資料「遺跡が語る豊橋の歴史」より

(2) 古代から中世へ

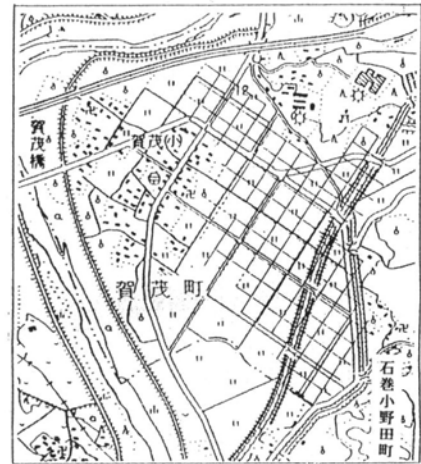
賀茂に残っていた条里制の跡 大化の改新の方針は、法律としてまとめられ、大宝元年(701)に唐の制度にならって大宝律令がつくられた。これによって、政治のしくみが細かく決められ、中央集権国家が出来あがった。

このとき、朝廷は、国民一人ひとりを把握するために戸籍を作った。そして、6年ごと戸籍に基づいて、6歳以上の良民の男子に2反(約20a)、女子にはその3分の2、賤民には、良民の3分の1の口分田を分け、死亡すると、国家へ返させるきまりであった。

これを「班田収授の法」という。このため土地は、整然と区画された。このことを「条里制」という。

この条里制の遺構は、賀茂にも土地改良(耕地整理)以前まであった。(29頁の図参照)しかし、土地改良のため破壊され、現存するものはほとんど見当たらない。定重・城前・栗八名・鶴巻の道路にわずか痕跡がある。賀茂を訪れた人が「賀茂で道に迷っても、道路がたて横平行に造られていて、すぐに元の道

に出ることができる。」と言う。このことは、条里制の跡を物語っているのではなからうか。さて、このような条里制が、いつ頃施行されたのであろうか。大化の改新前という説と大化後という二つの説があって、はっきりしない。豊橋市内に残る条里制遺構は、賀茂のほか、下条・大村・嵩山の各校区にある。



賀茂地区条里制遺構図「とよはしの歴史」より

歴史を語る賀茂神社 私たちの氏神、賀茂神社は、賀茂別雷命わけいかずちのみことを祭神として、聖武天皇の天平元年(729)に、山城国より勧請したと伝えられている。

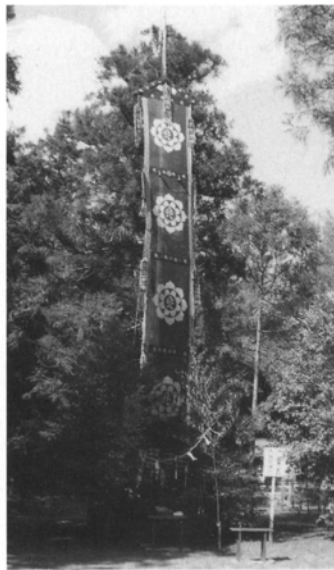
ところが別説に、勅命によって、白雉元年(650)5月1日、三河大伴直蘆の創建で天下泰平を祈願されたとある。また、寿永3年(1184)の記録によると、「敬神の念の厚かった源頼朝が、小野田荘を山城国賀茂神社へ神領として献ぜられた」とあり、わが賀茂も小野田荘内に入っていたのである。その小野田荘について、少し述べてみたい。伊勢神宮領以外は、社寺領・院・貴族領を問わず、「荘」と呼ばれていた。まず、神社領として、平安時代までさかのぼると考えられるものに、京都賀茂神社領の小野田荘がある。小野田荘は現在の賀茂町・西郷校区を中心とした地域であった。

次に賀茂神社は、徳川家康に関する話が多

く伝えられている。永禄11年（1568）12月、家康は岡崎を出発して浜松に向かう途中武運を祈り賀茂神社へ大旗を奉納したこと。

天正元年（1573）1月三河野田の合戦に敗れた時、賀茂神社に隠れ、難を免れたこと。

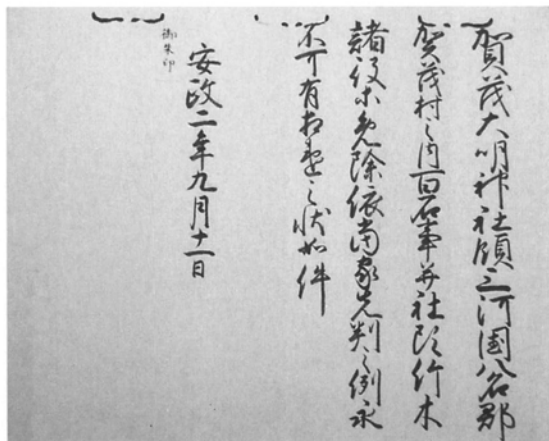
その際、賀茂神社神主、竹尾茂久が敵の去った後、家康を手厚くもてなした。そのため天正3年家康は御生祭用大旗を奉納したこと。



家康公奉納の「大旗」

また、天正元年6月、長篠へ出陣の折、賀茂神社へ参拝して、御旗料を奉納したことなどである。

やがて家康が征夷大將軍となり、徳川幕府を開いたとき、賀茂神社の神主、竹尾茂家を伏見城に招き、百石の朱印状を授与した。



「朱印状」の写し

以後、代々の将軍も同じように扱ってくれたのである。賀茂神社については、文化財の項でも述べることにする。

(3) 江戸時代の賀茂

賀茂の領主支配の移り変わり 江戸時代、八名郡賀茂村の領主支配は、天領→石戸領→天領→半原領と移り変わった。

賀茂村は、寛文8年（1668）安部丹波守信之の支配下に入り、幕末まで安部家の所領であった。

安部氏は、武蔵岡部（現埼玉県大里郡岡部町）・摂津桜井谷・三河半原（現新城市富岡）の三か所に陣屋をおいて支配していた。居所は岡部にあったので、正式には岡部藩と呼ぶべきであるが、慶応4年（1868）4月半原に移って、半原藩となった。

したがって、半原藩の名称は、幕末の極めて短期間にすぎない。しかし、江戸時代を通じて、半原陣屋の支配を受けていたので、ここでは、半原藩領と呼ぶこととする。

農民の暮らし 江戸時代、賀茂の農民の暮らしは、どうだったのであろう。定重・城前・栗八名・鶴巻部落は、現在のように坦々とした平地で、よく洪水も発生したため、地味はよく肥えて、農業をするには、最も適した土地であった。でも、稲作は思うようにいかず、日照りが続くと、水不足の悩みは深刻であった。

上流の短い間川や用水池（坂井の高当池、賀茂神社西にあった池、加納寺の裏の池）では水量も少なく、干上がってしまうことも度々あった。そのため、少雨のときは、アワやヒエなどを食べてくらしていた。

このようなわけで、農民の暮らしは厳しく小作人たちは借金が増えて困っていたらしい。豊川市金屋町の鋳物屋、中尾工業には、今も賀茂の人たちの借金証文が残されている。

水不足に悩む農民達のために、水路を造って豊川から賀茂へ水を引きこむことを考えたのが、明治に登場する竹尾彦九郎氏である。

照山城と加納寺 賀茂には、加納寺、長全寺、

安養寺、光勝寺、本願寺、稲垣院の6寺がある。

その内の城照山加納寺について述べる。この寺は、照山の南麓にあって、創立は文正元年（1466）室町時代。4世林昌法印のとき、寺が炎上して、一旦廃絶した。

戦国時代、牧野筑意が当寺の跡に照山城を築き、永禄11年（1568）家康が遠州攻めするとき、この城に泊まったといわれている。その後廃城となって、徳川中期の天明8年（1788）加城院泉城本覚法印という僧が、当寺の再興を図り、ほぼ完成した頃亡くなった。

その子孫が再興につとめ、数代の後、往時の石上院を「城照山加納寺」と改称した。当寺の本尊は、不動明王立像である。

大正頃作の御詠歌「弘法大師賀茂霊場礼讃」には、6部落と6寺をたくみに詠みこんである。加納寺及び照山城に関するものを紹介すると、「あな有難や尊やな、万の願い加納寺」「照山城の前なれば、地名を城前と言い伝う」「杖にすがりて七曲り、登りて見れば照山城のあと」とある。

竹尾家の両鬼門を護るといわれた安養寺と光勝寺

賀茂町字城屋敷2にある七宝山安養寺の創立は文明2年（1470）で、開山は、豊川妙巖寺の2世靈巖性慶和尚。開基は賀茂神社祠官竹尾



安養寺

家の先祖であったと伝えられ、寺域は竹尾家の東北隅（鬼門）に接したところにある。開基竹尾家については、那賀山乙己文氏の研究によると、同家は元西三河の加茂郡にあったが、重吉彦太夫のとき、享禄年中（1528～31）初めてこの地に移って、賀茂神社の祠官となり、すでに2男3女があった。長男長治郎は

後彦太夫と称して家を嗣ぎ、次男治太夫は、同村山本助治郎へ養子に、3人の女子は各家に嫁いだが、特に末の娘は、家康の侍女となった。

安養寺の開基については、竹尾家と寺伝には年代的に差異があり、おそらく、文明創立当初の開基は別にあつて、後世当寺が衰退していたのを竹尾家が再興したものと思われる。

光勝寺は賀茂町字城前27にあり、曹洞宗妙巖寺の末寺である。当寺と安養寺は、一種の姉妹寺院とも言え、開基



光勝寺

竹尾家の東北を安養寺、西南を光勝寺として、いわゆる両鬼門に建てられている。同家の菩提寺であると共に、厄払いの役目を成したものである。

さて、仏主神従の考えは、江戸幕府の終わりまで続いたが、江戸末期から国学者を中心に、神仏習合の考え方を否定し、古神道の復興運動が展開された。そして、明治維新を境に、神社内にあった神宮寺も除去され、神社から仏教が影を消したのである。これを排仏毀釈という。

(4) 明治になって

このようにして、賀茂においても、排仏の思想や神道改宗運動が現われ、明治維新になると、竹尾彦九郎が神仏分離という国の政策遂行に当たった。その結果、安養寺、光勝寺ともに、影が薄くなっていったのである。

明治の大合併と賀茂村 明治になって、廃藩置県が行われると、賀茂は、半原県になる。豊橋県、西尾県、岡崎県、刈谷県、拳母県、田原県、西端県、西大平県、半原県、重原県と10藩が10県となった。

そして、明治4年(1871)半原県がなくなって、額田県になり、さらに、明治5年(1872)には、額田県もなくなって、愛知県になった。

明治21年(1888)には、市制・町村制が公布されて、新しい市や町・村がつくられることになった。この法律により、これまで「吉田」と呼ばれていた町々が合併して、「豊橋町」ができた。後になって、豊橋町には、となりの豊橋村も加わった。

こうした合併は全国で行われ、「明治の大合併」と呼ばれている。しかし、賀茂の人たちはどこの町や村とも合併せず、これまで通りの賀茂であることを選んだ。

庚申さま(庚申講)と報徳さま(報徳講)

江戸時代、人々の間に色々な信仰があった。今でも続いているものの中に、庚申さまがある。古くは中国から日本に伝わり、色々な願いごとが混合して、日本の庚申信仰になったといわれる。

これを信仰する人たちが、仲間(講)をつくり、庚申の日に仲間の人たちの家を回り順で、勤行の場とした。この家のことを「トウヤ」とか「ヤド」と呼び、トウヤの人は各家を回って米を集め、料理の準備をするのである。当日の夜、トウヤに仲間の人たちが集まると、掛け軸を中心に「お参り」「勤行」「食事」その後は雑談をして、ひとときを楽しむ。この雑談が仲間の人たちとの情報交換やコミュニケーションの場となっていた。

ところで、前述のように、明治になって廃仏毀釈、神仏分離令が出され、庚申講も仏と神の混在のような点もあって、改革を迫られた。その頃、賀茂神社の宮司であった城前部落の竹尾氏は、東三河でも名高い国学研究の神官でもあった。そのため、竹尾氏はこのことを部落の人たちにも説き、それまでの庚申講を解散して、百姓の神をまつり、農業を振興させるという立場から、報徳講を組織した。

庚申講の行事はそれまでのようにして、祭神を賀茂神社の祭神にし、祭壇も神式にして、祝詞をあげるという形式に変えた。また、城前部落を二つに分けて、東組の報徳講、西組の報徳講としたのである。

庚申講当時の青面金剛の石像だけは、今も光勝寺の境内に残っている。

賀茂町内で報徳さまとして行なっているのは、城前部落と栗八名部落である。定重・鶴巻・坂井・照山部落は、庚申さまとして、今も行なっている。



光勝寺にある庚申碑

城前部落の東組、西組は合併されて、今は公会堂で、数名の当番制による準備で行なっている。

食料事情の厳しかった昭和時代の中頃までは、庚申さま、報徳さまの料理(御飯、みそ汁、煮物、酢の物、漬物など)がたいへんおいしかったので、楽しみな日となっていた。

当時は、麦に米を混ぜた黒っぽい色の御飯を食べていたので、庚申さま・報徳さまで食べるお米だけの白い御飯の味は、格別おいしかった。また、トウヤの家の近くの子供たちにも、昼間の食事をふるまってくれたので、子供たちにとっても、楽しみな日であった。

今、各部落での実施回数も少なくなっているが、それぞれの方法で続けられている。



城前の報徳さま（報徳講）

竹尾彦九郎の業績 これは、後の「人物」の項で述べる。

(5) 大正時代の賀茂

ランプから電燈へ 明治45年（1912）4月、大野町（現新城市）は発電所を起し、八名郡内最初の電燈が点いた。（当時の「東三電気株」、現在の「中部電力株」の前身）。その後、次々と郡内に電力が供給され、大正7年（1918）10月になると、賀茂村にも電燈が点いた。当時は、20W位の電球であったがそれまでのランプに比べれば、随分と明るくなった。しかし、電燈はおおかたの家では家中で1燈しか付けていなかった。それに電気も最初の頃は、一日のうち2～3時間しか通電しなかったり、停電もよくあり、その度にランプやロウソクを点けたりで大変であった。

賀茂の中央通り＝県道 賀茂を南北に貫いている道路は、主要地方道豊橋・鳳来線（県道）である。その昔は、「川添道」とよばれていたが、明治時代に郡制ができて「郡道豊橋街道」（大正4年2月認定）となった。その後、大正9年（1920）には「道路法」が施行され「郡道賀茂・豊橋線」として次第に整備されていった。それでも、道幅は9尺余（約3m）の狭い道であった。

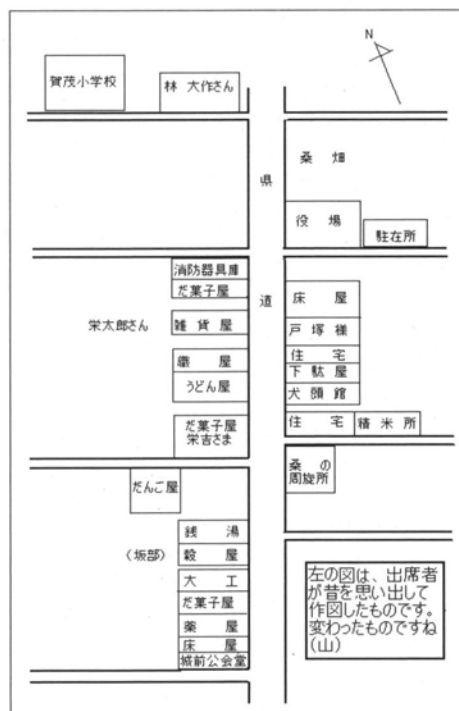
そして、大正12年（1923）3月には郡道の廃止（郡会議員、郡役所の廃止等郡制の改変）

とともに「県道豊橋・本郷線」となり、さらに改修が進み現在の道幅は約7m（街中）になっている。

この道は、賀茂の真中で「賀茂郷」の永い歴史を見つづけてきた「道」である。

平成6年5月号「賀茂文化」より抜粋
 第6回若返り会（平成六年三月十一日開催）
 出席者 小柳津ミヤ子・坂田なみ
 ・城田こう ・星野よしえ
 ・山本みさえ ・石田吉助
 ・山本瑛一（順不同）

◎県道について
 ・賀茂に県道ができるまで、村の人達は日当五十銭で弁当もちで出かけたものだ。（小柳津）
 ・私の子供の頃、この県道ができたが、トロッコが使われていたことを思い出す。（石田）
 ・その頃の県道は、現在の山本西会の裏をとり私の下瀬木の畑を通っていたようだ。（小柳津）
 ・校区市民館の裏の消防屯所の側を元県道が通っており、林大作さんの屋敷の西には門構えの立派な家があった。（石田）



店を中心とした大正時代後期の定重・城前の町並み

(6) 太平洋戦争中の暮らし

「物不足」に耐えて 昭和16年（1941）12月8日太平洋戦争が始まった。最初のうちは軍艦マーチに乗って流れる、連戦連勝の「大本営発表」報道に酔い痴れていた。しかし、昭和17年（1942）には、米、麦、みそ、しょう油食用油など主な食料品や日用品が物価統制で配給制になった。やがて、戦争で輸入も止ま

り衣料品を含む「総合切符制の導入」と言う具合に、「物不足」は益々深刻になり、国民の耐乏生活は極限に近かった。

戦争中の苦しい生活については、城前の小柳津ミヤ子さんが中日新聞「くらしの作文」(平成16年8月13日付朝刊)に投稿されている。戦争と病気(中日新聞「くらしの作文」より)ミヤ子さんは、『終戦の日が近づくと、苦しかった日々を思い出す』として、太平洋戦争の最中、夫は召集され義母、義妹、自分の子供も病に冒されていく中で、『食べ物がなく生活のため義父と必死の農作業。病魔との闘いは幾年も続き、義母と義妹は家庭療養の末に他界しました。』と綴られている。そして、『イラクや世界各地で戦争が絶えず、私のように間接的に苦しむ人も少なくないはず。みんなが平和に暮らせたらいいなと思います。』とむすばれた。

無謀な戦争によって、大きな苦しみを被った当時の国民の姿を生々しく証言しているのである。

怖かった機銃掃射 昭和20年(1945)になると、空襲はますます激しくなり各家では防空壕を作り空襲警報のサイレンが鳴るとそこへ逃げ込んでいたそうである。

戦争を体験した人の話では、「終戦も近いある日、田んぼに草取りに出かけ「間川」の栗八名橋(当時の)まで来たところ、空襲警報のサイレンが鳴ったので慌てて橋の袂の笹藪の中に隠れた。ところが、被っていた菅笠がどうしても飛行機から見えそうで、うまく隠せない、しまいには笹竹の間に立てて挿し込んで隠した。そのうちに、戦闘機が飛んできて橋を『ダッダッ』と撃ったので自分がいつ撃たれるかと、おそがくてしょんなかった。飛行機が去ってしまっても、しばらくは出てこれなんだ。」と語っていた。そして、「もう二度と戦争はいやだ」とも。

(7) 新しい憲法のもとで

「新しい憲法のはなし」

「みなさんあたらしい憲法ができました。そうして昭和22年5月3日から、私たち日本国民はこの憲法を守ってゆくことになりました。このあたらしい憲法をこしらえるために、たくさんの人々が、たいへん苦心をなさいました。ところでみなさんは、憲法というものはどんなものかごぞんじですか。・・・」

昭和22年(1947)8月2日文部省(当時)が発行した中学校一学年用社会科教科書一憲法より

日本国憲法五原則

- (1) 国民主権と国家主権
- (2) 恒久平和
- (3) 基本的人権の尊重
- (4) 議会制民主主義
- (5) 地方自治

農地解放 昭和20年(1945)8月15日、日本はポツダム宣言を受け入れ連合国に無条件降伏をした。昭和21年(1946)11月には新しい憲法が公布され、これまでの政治体制や制度が大きく変わった。その一つに、「農地解放」がある。「農地解放」は賀茂に農地を持っているが①賀茂に住んでいない人(不在地主)②自分で耕作していない人、寺、神社など(不耕作地主)から国が強制的に農地を買い上げて小作人(その農地を実際に耕作している人)に売り渡した制度である。又、小作人の「農地を耕作する権利」を保護し、貸借契約については、文書で結びこれを許可制とした。

賀茂村農地委員会(小作人代表5人・地主代表3人・自作農代表2人の合計10人で構成)は、昭和22年3月31日の買収を皮きりに、昭和26年(1951)3月2日まで買収と売り渡しを行い、たくさん自作農家(自分の農地を自分で耕作している農家)を創り出し、農業に意欲をもった生産が始まったのである。

	田		畑		合 計	
	反	歩	反	歩	反	歩
S.22	526	102	109	126	635	228
S.23	148	712	80	819	129	601
S.24	6	822	3	810	10	702
S.25	2	721	1	115	3	906
S.26		229		320		619
計	684	726	115	400	801	126

賀茂村農地買収面積一覧表

町村合併

- ① 昭和22年（1947）4月地方自治法が施行され、「女性の選挙参加」＝「参政権」が認められて最初の第一回統一地方選挙が行われた。

賀茂村でも「女性の参政権」が認められて、初めての選挙で、山本安吉村長が誕生した。

- ② 新しく生まれた「地方自治体」ではあったが、賀茂のような小さな規模の村では行政を運営していくための財源の確保すら困難な状況であった。そこで、愛知県の指導もあり同じような悩みを持った金沢村と合併することになった。金沢村とは隣村でもあり、これまでも共同で役場や中学校を設置するなど助け合っていた。そのため「合併」はうまく進み昭和26年（1951）4月1日に「八名郡双和村」が誕生した。

- ③ 誕生したばかりの双和村だが、昭和28年（1953）「町村合併促進法」が施行されると、再び石巻村や豊橋市との合併が必要になった。昭和29年（1954）9月9日双和村村議会が、全員協議会を開き「満場一致」で豊橋市との合併を決議し、村当局も豊橋市に対して、第一次合併（昭和30年（1955）3月1日）を豊橋市に対して申し入れた。しかし、金沢地区の一部の人達は宝飯郡一宮村との合併を強く希望した。

そのため、最終的には愛知県の判断により双和村賀茂地区は豊橋市へ、同金沢地区は宝飯郡一宮村へ合併することになった。

昭和30年4月1日八名郡双和村大字賀茂は豊橋市と合併し、「豊橋市賀茂町」となった。

(8) 安全で住みよい町、賀茂へ

土地改良事業 戦後の復興は目覚しく、経済的にも大きく発展したが、一方で農業を取りまく状況も変わってきた。農業の「近代化・合理化」が叫ばれ、人々は工場などへ働きに出かけるようになり、専業農家は減り、兼業化が進んでいった。賀茂においても、昭和40年（1965）3月31日「賀茂土地改良区」が設立され、農地の集団化、区画の整理（1筆10aを基本）などの耕地整理が行われた。又、これに合わせて「間川」の改修付け替え工事でも建設省（当時）によって行われ、「間川」は東に約1km移動した。土地改良事業は、色々と困難もあったが、昭和50年（1975）9月には換地処分、同54年（1979）に農道、排水路などを公有地として豊橋市に移管して終了した。賀茂土地改良区は、同56年（1981）3月14日をもって解散した。

関係農家数	関係農地面積		1団地あたりの面積	
	田	畑	従前地	換地後
戸 585	163.8ha	10.6ha	651m ²	
	43.6ha			927m ²
	218ha			
団体営圃場整備事業（総事業費）1億3千万円				

土地改良事業農地面積等一覧表

その後、農林省（当時）の補助事業を受けて「賀茂コンバイン組合」が設立されるなど農業の機械化も進んだ。しかし、国の「減反」政策、食糧管理法の廃止、農産物の輸入拡大などは日本の農業を大変な困難に陥れている。

賀茂橋の開通 高度経済成長政策が本格的に進む中で、自動車・バイク等の普及は通勤・通学、行楽、人と人との交流など賀茂に住む人々の生活範囲をどんどんと広げていった。そうした中から、昭和41年（1966）4月「豊川」に「賀茂橋」が架けられ、永い歴史を持つ「賀茂の渡し」が廃止された。これにより、豊川方面への交通は格段に便利になった。

さらに、昭和44年（1969）には東名高速道路が全面開通し、豊川インターチェンジを通じて全国へとつながったのである。



現在の賀茂橋（豊川市側より賀茂町を望む）

水道を敷く 東名高速道路のチェックバリヤが賀茂地区に設けられることになり、それに関連して賀茂校区にも「上水道」を敷こうとの機運が高まった。昭和61年（1986）12月校区に水道建設委員会が設置され事業が進められた。平成元年（1989）3月水道委員会、総代会の努力と全校区民の協力で完成した。

項目	内容
給水戸数	221戸（その他お寺・公会堂など）
水道管総延長	15,000m
総工費	2億8千8百万円

賀茂地区上水道給水戸数等
（「昭和時代の賀茂町」より）

現在では、水道栓をひねれば「ジャー」と水が出て、風呂の水を汲むのも楽になった。（昔は、風呂の水汲みは主に子供の仕事であった。）

洪水のない賀茂を 賀茂は古くから「豊川」の出水に悩まされてきた。昭和40年（1965）7月に「豊川」沿い住民の期待の中で「豊川放水路」が完成した。しかし、この完成による効果が本当に発揮されるのは下流の三上橋（当時は、「水くぐり橋」と呼ばれ大水が出ると水の中に潜ってしまった。）が昭和55年（1980）11月に、架け替えられてからであった。賀茂を「弧の字」のように取り巻いている「豊川」の堤防は、昭和43～44年（1968～69）にかけて、改修、嵩上げ工事が行われた。

高さ5.5mの大きくて立派な堤防ができたが、結局「霞堤」は締め切られなかった。

江戸時代からの「下流を守る賀茂の役割」は400余年たった今でも続いているのである。

子供らの夢、希望

賀茂小学校の5・6年生に聞きました。

- ◎ 私は、こんな人になりたい。
 - ・ みんなを明るくさせる人
 - ・ 人や動物にやさしく接する人
 - ・ スポーツの選手
 - ・ みんなの役に立つ人
 - ・ 社会的で前向きにもの考える人
 - ・ 親切な人
- ◎ 将来賀茂をこんな町にしたい。
 - ・ 安全で楽しい町
 - ・ 自然が美しく豊かな町
 - ・ 人間関係の明るい町
 - ・ 休耕田畑がない町
 - ・ 洪水の出ない町
 （霞堤を締め切ってほしい。）

平成17年（2005）8月30日

2 産業の移り変わり

(1) 農業

① 米と麦の二毛作時代

賀茂の地も明治の頃から米麦主体の農業だった。明治24年(1891)7月、八名郡農林会は試験場規則を定めて知事の認可を得た。26年、27年にかけて米麦の種類試験、肥料試験、作方試験が行われ、八名郡の各地で担当員が選出された。賀茂では白井愛作・林繁太郎が担当員となって研究、改良に力を注ぎ、一般に技術を広め牟呂用水の完成もあって良質多収穫を目指すようになった。こうして米の生産量はぐんぐん増加し、当時八名郡役所米収穫量の統計によると、次の表のようになっている。

年 代	米の収穫量
明治22年～31年	1石8升8合6勺
大正元年～11年 (10年平均)	2石8斗3升5合4勺 (反当り)
	(八名郡誌)

米収穫量表

昭和時代に入ってもその態勢は続けられ、戦後の農地解放で自作農家が増加し生産意欲も増して、収穫量も増加の一途をたどった。麦は食糧事情もあって、昭和40年代に入ると姿を消していったが、米もやがて生産過剰の時を迎え、44年(1969)にはついに生産調整が行われるようになり、50年代には国の政策で転作が始まった。そんな状況下、平成14年(2002)になって水田に麦と大豆を作る話があり、賀茂町内の水田をブロックに分けて年度別に栽培することになった。平成15年度はAブロック、16年度はBブロックと実施されたが、平成17年度は地権者の反対もあって実施しなかった。

② 一時代を支えた養蚕「おカイコ様」

明治10年(1877)、賀茂神社の神主竹尾準氏は、養蚕法の講習を受け人を勧誘したが、当時養蚕業は山師的(失敗が多い)な仕事として見る者が多く始める者はいなかった。それでも準氏は根気よく奨め、明治24年に入ると賀茂にも養蚕の理解者が出てきて蚕を飼い始め、明治30年代の中頃には目立って増えた。蚕は春蚕・夏蚕・秋蚕・晩秋蚕と年4回飼う事ができるが、晩秋蚕は飼う人が少なかった。そうした養蚕業の増加と共に各地で蚕種製造が行われ、賀茂では定重の犬頭館がその業務に当たった。当時貴重な収入源となっていた養蚕は各農家で家族が寝る場所に困る程飼われた。昭和29年(1954)の調査で賀茂の養蚕農家戸数は95戸となっており人々は「おカイコ様」と尊ぶようになった。

③ 果樹・園芸農家

昭和30年代に入ると、賀茂の農業も転換期が訪れ、養蚕から果樹園芸に切り替える人が出て来た。苺栽培の先駆者山本壽氏や桃の新品種「勘助白桃」の育種者でもある山本勘次氏等の研究熱心な人材にも恵まれた。

園芸はハウス栽培が多く、苺はその主流となって一時は30戸近くの農家が営んだが、その後労力不足もあって減少した。花卉園芸も菊を中心に一部で栽培していたが、野菜専業農家は少ない。果樹は柿・梨・ブドウ・桃・イチジク等の生産者がいるがその中でも柿栽培者が最も多く、平成17年度現在組合員が52戸、組合員外も10戸以上の生産者がいる。組合員は農協の選果場を通して「石巻の柿」として大都市に出荷している。品種は早生次郎が多く、一時人気の西村早生は減少した。一方梨は柿より高収入が見込まれるため一時は20戸余りの生産者がいたが、柿より手間がかかるので減少し、平成17年度現在14戸で坂井部落の生産者が圧倒的に多い。

④ 有機栽培の安藤農園

安藤桂伍氏は、賀茂でも数少ない野菜専業栽培者である。彼は高校時代から農業を専門的に学び、農業に対する情熱が強く、登校時にも自分で試作した野菜を原付自転車で青果市場に運んでいた程である。当時西洋野菜と言われたレタスの栽培に力を注ぎ、高校卒業後は、4Hクラブに入り、リーダー的存在となって活躍した。230a余りの所有地にも恵まれ、彼の農業はやがて有機栽培に目が向けられた。無農薬・無化学肥料を目指し模索の年月が続く、時には虫を手でつぶすというたいへん手間のかかる作業もした。そうした苦勞のかわりがあり、彼の有機栽培は軌道に乗り始めた。彼はこの栽培方法に賛同する消費者への販売ルートを生協同組合に求めて、昭和60年(1985)に生協専用の出荷場「恵実」を建設したのである。恵実では5軒の仲間と共に、土曜日を除き毎日出荷をしている。

彼の独特な栽培方法と販売ルートを学ぶため、大学生や生協専従の見習生が研修に訪れ、活気づいた時期もあった。平成3年以後、安藤氏宅には、農業を一切置かず有機質肥料を専門に製造している業者と契約し、肥料を購入している。そのため彼は業者に色々と提案したりしてより良い肥料を追究している。現在ビニールハウスが60a程あるが、そこは長男が中心となって主に小松菜を栽培している。また、パート2名を含め5人の労働で忙しく働いている。安藤氏の信念は「健康で元気な野菜を作る事、そうすれば虫も病気も無くなる」である。



生協出荷場 恵実

⑤ 農業機械の発達と農作業の変化

明治時代、賀茂に農業用水を導いた竹尾彦九郎氏は、農作業に牛や馬を使う事を奨励した。当時は農機具も不自由していたので牛馬の力は大きく、彼の熱心な指導で大いに普及し、牛や馬を飼う村人が増え「博勞」と呼ばれる牛馬の仲買人もいた程である。馬は足が速く、農作業が難しい面もあり、どちらかと言えば牛に頼る人の方が多かった。こうした畜力利用の時代は長い間続き、昭和30年代になって動力機械の導入が始まったのである。

登場した耕耘機は田畑の耕起や運搬車を接続して物を運ぶ事もでき都合のよさから大いに普及した。昭和40年からは土地改良事業が始まり、土地の区画が整理され、道路も広くなった。そのため運搬はトラック・耕起はトラクター・稲刈りはバインダーからコンバイン・果樹園の消毒はSS(スピードスプレー)となり、短時間で能率よく沢山の仕事が出来ようになった。このように農業機械の飛躍的進歩により農作業が楽になり、時間的ゆとりも生まれるようになった。ただ機械の購入費や維持費が大きく採算が合わない面もあることが課題でもある。賀茂の農業の特色として小規模経営が多いことと兼業農家が多いことがあげられる。最近では作業者の高齢化が進み、委託作業や休耕する田畑が目立つようになり、特に水田は豊川市とか宝飯郡等、他地域からの入り作業者が多くなってきた。遠方からの作業者は車社会を反映した形となっている。

(2) 商業

① 昭和に栄えた商店

交通の手段が自転車しかなかった頃から、賀茂にもいろいろな商店があった。昭和に栄えた店は別表のように親しみをこめて愛称めいた呼び名で知られた店が多かった。

屋号	販売品	所在地
織屋	ピンツケ油等、髪結に使う備品	定重
ケンジーサー (本)	塩・砂糖・切手等雑貨	城前
日の出屋	小料理	定重
二本杉 (今川)	酒、アメ、菓子	照山
エーキッツアー	駄菓子、雑貨	定重
林屋	文房具	定重
センキッツアー (中西)	まんじゅう等の和菓子 (製造販売)	鶴巻
竹尾薬局	くすり、タバコ、農薬	城前
タッペーサー (富山)	下駄、雑貨	城前
山本豆腐店	豆腐、アゲ、うどん製造	城前
魚屋 (牛丸)	鮮魚	城前
山崎屋	酒、食料品、文具	定重
ダンゴ屋 (松井商店)	食料品、菓子、タバコ、(開店中)	定重
徳升商店	作業衣、雑貨 (開店中)	定重

昭和に栄えた商店

② 小さな町の魚屋さん

昭和40年頃、城前の竹尾新二郎氏宅のとなり小さなトタン屋根の魚屋が出来た。ノッポでブッキラ棒な物言いの店主牛丸よしえもん氏は、商売人らしからぬ性格の持主で、天気の良い日も長靴をはいて魚を売りさばっていた。賀茂のような小さな町に魚屋は珍しく人気もあった。ところが昭和44年(1969)の集中豪雨で店が水浸しになったとき、店主はびっくりして「とてもこんな所には暮らせない」と奥さんの実家へ引越して行った。

③ 農協店舗とガソリンスタンド

昭和48年2月28日、農協賀茂支所横にオープンしたAコープ賀茂店は、スーパー風の店なので保育園児送迎の若い主婦が買い物をする格好の場となり、既設の各店へも影響をあたえるようになった。長い間町民に親しまれたこの店舗も、農協の統合で賀茂支所が無くなることから、平成14年(2002)3月20日をもって閉店となった。一方、昭和50年の7月31日には支所前にガソリンスタンドが設置さ

れ、セルフサービス方式でキーボードの番号に自分の鍵を入れると夜中でも給油が出来、都合の良さから契約者が多かった。時々ボードに鍵を入れたまま帰ってしまう人がいたり、夜中に給油の音が煩わしいという苦情があったりしたが、利用客には人気があった。しかし、農協店舗と同様統合の波によって平成14年3月28日、閉店となった。

④ 様変わりした平成の店

平成時代に入ると、賀茂の店も町民相手の商いから広域者を対象とする商いにかわってきた。平成元年には建材販売の「名豊」と「ミキ武道具店」、4年の1月31日にはコンビニの「サークルK賀茂店」、同11月にはオシャレな店「ラ、セゾン」がワコール製品販売の営業を始め、7年の8月にはサークルK賀茂店の前に「JOMO」ガソリンスタンドがオープンし、賀茂が以前より町らしくなってきた。



今までの店を一変した、サークルK賀茂店

(3) サービス業

サービス業を営む店は現在も続けている業者が多い。昭和の後半迄に姿を消した業種は銭湯(定重)・自転車店3軒・クリーニング店2軒・パチンコ店1軒等である。昭和31年に(故)杉本良伸氏が創立した「杉本新聞店」は、63年には長男一氏によって有限会社となり、賀茂一円に新聞を配達している。喫茶店は3軒あって、昭和46年(1971)照山に「東京喫茶」49年には栗八名に「かも喫茶」、平成9年定重に「リトルバード」がオープンした。

小さな町、賀茂に喫茶店が3軒もあって、町民の利用客も多く憩いの場となっている。又、自動車が普及してきた昭和50年には「山本商会」が誕生し、自動車の修理販売の営業を始めた。美容院は、昭和47年に開店した「ビューテーサロン栄」と「安藤美容院」の2軒、理髪店は、昭和50年開店の「松井理容店」と城前の「城所理容店」の2軒が営業している。平成に入ると杉本地区に「津具陸」の営業所が出来、運送業を開始した。

(4) 工業

農業地帯に大企業の進出 昭和30年(1955)八名郡双和村賀茂は豊橋市へ合併した。初代総代会長に就任したのは城前の竹尾福一氏である。その竹尾氏が発起人となって、昭和33年4月に誕生したのが「照山砕石」であり、まさに賀茂における鉱工業の夜明けとなった。

最初のうちは山の表面だけに石が軟らかく、アスファルト用には向かず、道路に敷くのが主であったが、掘っていくうちに硬く良質の石が生産できるようになった。地元でも道普請をした当時は砕石を分けてもらったりした。しかし、長年の採掘により賀茂の象徴でもある照山の変貌が傷ましくも思える。昭和43年、その照山の麓を流通の要となる東名高速道路が通ることになり、廃校となっていた双和中学校の跡地の土砂を大量に削除し、工事に使用したため、高台だった土地が平地になり、昭和44年そこに「(株)旭精機」が進出してきた。日本精工グループの中核企業の進出に地元からも多数従業員として入社した。昭和46年10月には工場に隣接する土地に24戸の社宅が建てられた。入居者は平成10年(1998)7月社宅取り壊し迄の間、賀茂校区のお付き合いをした。

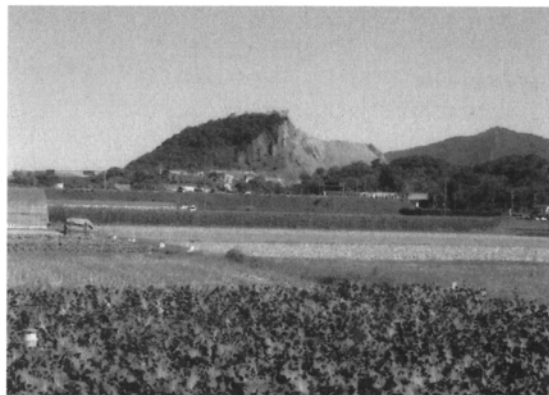


社宅24戸の写った旭精機の全景

その頃、照山の神山地区に大企業の進出話が起きていた。敷地4万2千㎡余りの広場に「(株)OSG」が進出してくると言うのだ。大企業の進出に地元の人たちは大いに活気付いた。昭和46年に第一期工事が完成し、圧造工具部門(ネジを作る工具)の生産が始まり、2年後の48年には第二期工事が完成して、エンドミル(金属を削る工具)の生産を始め、本格的な生産工場として動き出した。当時310名の従業員の中には地元的女性の方も多く含まれていた。

地元生え抜きの企業としては、昭和40年鶴巻の鈴木武雄氏がラジオの圧縮ボードのプレス加工を手掛け、48年2月には長男千秋氏が代表となって(有)ツルマキ製作所を創立した。その後は、オートバイ、自動車等の部品をプレス加工し、プレス金型の製造工場として自宅周辺に工場を設け操業している。同じく地元で林地区に「星野製作所」を開業した星野大幸氏も、48年から自動車のプレス加工の仕事を営んでいる。昭和時代の最後として、61年に豊川市から賀茂小学校西門前に「マルヨシ木工」が工場を構え、特別注文による家具の生産を行なっている。小規模企業の進出は平成に入っても続いた。平成元年に石巻で創業をした(有)ユキケミカル工業が、4年に染屋畑に工場を移し、24名の従業員でプラスチック製品のカメラ部品と車の部品を製造

している。その他、10年には山伏地区に(有)太田製作所が自動車部品の製造を開始し、同10年10月には徳用地区に(有)前田電気工業が機械の電気制御設計の事務所兼資材置場を設け営業を始めた。又、金型業が「高柳金型」と「伊藤金型」、塗装業は「坂田塗装」、建設業は「宮誠建設」、建築業は「石田建築」、「中野建築」等がある。賀茂のような農業地域にこのような多くの企業の進出は、新しい時代の波と言えよう。



大照山と吉祥山の遠望(平成16年)

賀茂町における条里制の遺構の一例 (P17参照)
(昭和39年~42年土地改良事業実施前)



「賀茂文化」 平成18年3月号より

3 総代会と校区の活動

(1) 校区の概要

豊橋市役所13階の展望室 から豊川の流れに沿って北東方面に目をやると、緑の平野の真ん中に山膚を半分けづられた赤茶色の小さな山が見える。これが照山で高さは元123m、私たちの町のシンボルである。この山のふもとに賀茂神社があり、賀茂しょうぶ園もある。また東名高速道路が東西に走っている。

北の新城方面から牟呂用水に沿って賀茂町に入り、東名高速道路のガードをくぐり抜けるとパッと視界が開けて一面に緑の水田が広がり、その中に賀茂小学校をはじめとする賀茂の部落が点在している。部落は6部落(町内)に分かれているが、下表のように人口変動も少なく、保育園も小学校も校区内に1つだけで、豊橋市では最も小さな校区の中に入る。

区 分	世帯数	人 口		
		男	女	計
明治21年	298			1,401
大正11年	279			1,593
昭和30年	299	855	898	1,753
昭和50年	307	691	735	1,426
平成 元年	328	739	766	1,505
平成12年	359	746	756	1,502

人口・世帯数の移り変わり

そのため町民は昔からの顔なじみが多く、春のお祭り、秋の運動会や文化祭などには町民が一体となった盛り上がりが見られ、良い意味で地域の連帯が保たれて現在に至っている。

(2) 総代会の構成と主な活動

平成13年(2001)に制定された「校区自治運営規約」では、総代会は6町内から選出さ

れた町総代6名で組織し、校区総代会長はじめ役員は1年(再任は妨げない)で、校区内の他の各種団体(社教・文協・体育・消防等)の委員や役員と協力して・町民相互の親睦・福祉の増進・文化の向上・校区の発展をめざして活動する、としている。その多彩な活動の中から季節ごとの主な行事を中心に紹介する。

①春 桜が咲き始める頃、賀茂神社で「新退任奉告祭」が行われて新年度総代会の活動が始まる。4月の最大の行事は賀茂神社春の大祭への奉仕で、京都の葵祭りを模して「葵」と「桂」の葉を社殿や神主の冠に飾りつけ、「競馬」その他の行事を行う。総代会は式典への参列だけではなく受付や鬼が撒く菓子の世話、餅投げなどの行事に終日参加して祭りの一端を担う。

5月には敬老会が行われる。秋は果樹の収穫やイチゴの定植などで忙しいため、他の校区と違って5月に行う。75歳以上の高齢者100名ほどが出席し、会食や演芸を楽しみながら旧交をあたため励まし合う。また、下旬から6月にかけて「花しょうぶまつり」が始まり、毎年18万人以上の人々が賀茂町を訪れる。田植えなどの農繁期であるが、機械化でゆとりのできた時間を利用して、賀茂文協を中心にひょうたんや花しょうぶの展示即売、茶会や狂俳大会などを開いてまつりに参加し町のPRや活性化に努めている。

②夏 青々とした水田を涼風が吹きぬける7月には、校区内各町対抗のソフトバレーボール・インディアカ大会が開かれ、汗と共に暑い夏が始まる。夏休みともなれば早朝のラジオ体操や盆踊り大会(夏祭り)に子供から大人まで一緒になって活動の輪が広がる。この陰では青少年健全育成・非行防止のための講演会や巡回が行われ、改めて家庭や地域の和を問いかける社教やPTA、健全育成会など

の活動がある。

③秋 柿の実が色づき黄金の稲穂が波打つ9月下旬、校区運動会が小学校・保育園と一体となって開かれる。子供達の真剣な競技、各種団体の特色ある種目、各町対抗年齢別リレーなどに老いも若きも夢中になって声援が送られる。

10月賀茂神社での招魂祭が終わると11月3日校区文化祭が小学校体育館と校区市民館を会場に開かれる。文化協会の各部を中心に作品展示・演芸大会・茶会などが終日行われ1年間の活動成果が発表される。

秋も深まった11月下旬には校区防災訓練があり、消防団や消防署の協力を得て避難訓練・初期消火・地震体験などのほか、救護訓練・無線体験・防災講話など参加者全員が体験できる新しい訓練が加えられた。

④冬 年の瀬が迫る12月末には、消防団による年末特別警戒（夜警）があり、一方では総代会による毎月0の日の立番やPTAによる通学路立番などで安心・安全の町実現のため地道な活動が続けられている。

元旦には、午前6時のまだ暗いうちに賀茂神社で「歳旦祭」が行われ、寒さの中で新年の緊張に包まれながら新しい年への決意を固める。

1月中旬の石巻地区合同成人式が終わると、早や1年間のまとめの時期がやってくる。栗八名川の改修工事や校区の交通安全施設整備などへの対応、次年度役員を選出が終わると2月下旬には最後の行事「賀茂神社境内下刈」の奉仕作業がある。

これらを無事に乗り切ると、3月は各種委員会のまとめや引き継ぎを行い、校区会計決算・会計監査を経て1年間の総括を行なって、3月末には新総代会への引継ぎが完了する。

(3) 校区の活動

総代会に協力している各種団体の中で、今後、高齢社会の進展・週休2日制の普及などに伴い重要視される3つの団体について、その活動概要を紹介する。

①賀茂校区文化協会 高度経済成長を経た昭和50年代の日本では、ゆとりある時間の有効な活用が求められるようになり、その活動拠点として市内の各地域に校区市民館を建設する構想が進められていた。当時、市の社会教育指導員であった岩瀬専一氏は、校区総代会と地域の協力者に呼びかけて、昭和54年（1979）6月にこの会を設立した。

発足当時は、岩瀬会長以下次のような15部で構成され、会員数は180名であった。

郷土文化・短歌・俳句・狂俳・書道・絵画・
盆栽・生け花・舞踊・詩吟・カメラ・卓球・
囲碁将棋・麻雀・着付

当初は校区市民館が無かったので、部落の公会堂や部長の個人宅で練習や研究を行っていたが、昭和56年3月に市民館が竣工し本格的な活動の場が提供されたので、活動の輪が次第に広がって行った。平成元年11月には10周年記念文化祭と式典が行われ、10周年記念誌として「賀茂神社誌」を発刊した。

平成8年（1996）3月には、毎月発行している「賀茂文化」が200号に達したので、記念誌として「生ありて」という戦争体験記が発刊され、戦後50年をふりかえる貴重な出版物として高く評価された。



賀茂校区文化祭（体育館展示）

平成10年の創立20周年には、「賀茂文化臨時増刊号」を発行して20年間の活動をまとめると共に、文化祭では特別展示として我が家の逸品・珍品を30点余り展示し好評だった。この当時は次のような24部で構成され、会員数は308名となっていた。

カラオケ・いけ花・書道・ひょうたん・
西川流舞踊・愛馬・菊趣味・舞踊・写真・
盆栽・狂俳・囲碁・菖蒲・俳画・郷土研究
茶道・短歌・手芸・俳句・民謡・ビデオ・
木工・子供会育成・空手

平成15年（2003）には創立25周年を迎えて、25周年記念文化祭として・激動の昭和展・マジックショー・ラッキー抽せん会などの特別行事を行い、翌年3月には賀茂文化300号記念誌として「昭和時代の賀茂町」を出版した。設立以来のこうした活動が認められ、昭和62年（1987）12月「豊橋市文化表彰」及び「豊橋文化振興賞」が授与されている。

現在の賀茂文協年間行事は、4月の総会で新役員や活動計画が承認され、5月には新会員名簿の作成、6月には花しょうぶまつり協賛の展示即売・茶会・狂俳大会・花しょうぶ株分けなどがある。9月に校区文化祭の基本計画が承認されて、11月3日には創立以来欠か

さず開催されてきた文化祭が、小学校体育館と校区市民館の2会場で盛大に行われる。

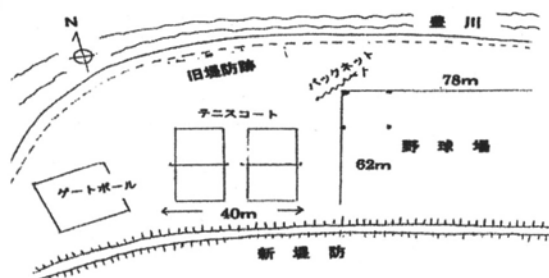
ひょうたんの展示に遠く藤沢市からの来観者があったり、保育園児から小・中学生の作品も交えて文字通り校区挙げての文化祭となっている。その他11月末の豊橋地区市民総合展への出品、12月初めの石巻地区市民館まつりへの出品・出演がある。

更に特色ある活動として、「賀茂文化」の発行がある。広報紙「賀茂文化」は創刊以来毎月発行を重ね、平成16年（2004）5月に300号に達した。創刊号はB4版1枚だったが、現在は8枚を原則として540部印刷して校区内は全戸配布。校区外には市役所をはじめ図書館、石巻地区市民館、校区出身者宅等に配布している。編集は文化協会会長が編集委員長となって毎月編集委員会を開き、校区のできごとや文化協会の諸活動、小学校・保育園の様子などをまとめ、印刷からとじ合わせまですべて手作りで行なっている。こうした手作り広報紙の発行が、町民相互の理解を深め、文協会員と地域文化の向上にも大きな役割をはたしている。

②スポーツ広場と体育委員会 多くのスポーツは、かつて学校や職場が中心で、地域には小学校の運動場や体育館しか練習施設がなかった。労働時間の短縮や生活の向上でスポーツ愛好者が増えると練習施設が不足し、満足な練習もできなくなった。

昭和57年（1982）体育指導員となった松井英雄氏は、豊川改修で空地となっていた河川敷に着目し、市の補助金と自衛隊豊川部隊の協力を得て校区スポーツ広場の建設に着手した。場所は東名高速道路北側でかつては旧堤防と畑地であった。多くの人々の協力で翌年5月待望の校区スポーツ広場が完成し、豊橋市長等を招いて「始球式」を実施した。

完成当時、野球場・テニスコート2面・



スポーツ広場見取図

ゲートボール1面であったが、時代の変化でゲートボール場を廃止してテニスコート3面とし、新しくグラウンドゴルフ場を増設して一層充実したスポーツ広場となった。

この広場完成と共に、ソフトボール・テニスクラブが発足し、平成2年に結成したグラウンドゴルフも小学校校庭から野球場東隣りに練習場を移して現在3クラブで活動している。

この広場利用上の悩みは、通常の草刈りやコート整備以外に、過去3回の洪水でネットが流されコート面が洗われて、その度に大変な労力と費用をかけて修復しなければならなかったことである。これらの困難は、スポーツを愛好するクラブ員の熱意で克服してきたといえる。

一方、小学校体育館の利用は、体育委員会による活動日の調整によって月曜日から土曜日まで毎晩交互に練習をしている。最も古くは、昭和60年(1985)にPTAバレーボールから発足した女子バレーボールで、その後平成8年(1996)空手部が結成され、以後レクバレー(9人制)、フアッカーズ(男子バレーボール)、パッピークラブ(インディアカ)と続々と部が結成されて、それぞれ市スポーツフェスタ等の大会に参加し、盛んな活動を続けている。

今後は学校の週5日制に伴って、スポーツ広場などで練習する小・中学生の姿も増えると予想され、体育委員会を中心とした施設の有効な活用により町民の健康増進と生きがい

づくりに役立つことを期待している。参考までに現在活動しているクラブ一覧表を掲げて皆様の積極的な参加を期待する。

○スポーツ広場			
クラブ名	会員数	活動日	責任者名
ソフト	男17	毎週日曜	稲橋敏夫
テニス	男13女10	月 2回	徳升城司
グラウンドゴルフ	男13女4	毎週金曜	星野 強
○小学校体育館(夜間)			
インディアカ	男9女10	毎週月曜	水谷龍洋
男子バレー	男10女3	毎週火曜	岡田浩二
女子バレーボール	男1女10	毎週水曜	山本幸三
空手	男11女8	毎週金曜	安藤智啓
レクバレー	女16	毎週土曜	浜田八重子
○小学校校庭			
ベタンク	男4	大会前	石田和男

スポーツクラブ一覧表(平成17年)

なお、賀茂町から豊橋市のレクリエーション協会へ水谷等氏が普及指導員として連絡しており、賀茂町のスポーツ関係の世話をしている。

③あおい葵会の組織と活動 賀茂の老人クラブは、第1葵会(坂井と定重)・第2葵会(照山と鶴巻)・第3葵会(城前と栗八名)の3つの単位老人クラブで構成され、これをまとめた校区老人クラブを「賀茂葵会」と呼んでいる。

平成17年度(2005)の会員数は男160名女202名、合計362名である。校区内で60歳以上の方ならどなたでも入会できるが、あくまでも任意団体で入会・退会ともに自由。会費は1人1,000円、1家族で2人以上の会員は1戸あたり1,600円としている。

市内のすべての老人クラブは、豊橋市老人クラブ連合会(市老連)に所属し、校区老人クラブの会長はこの市老連の理事となっている。市老連の活動の一部はいくつかのブロックに分かれて行い、賀茂は石巻ブロックに所属して玉川・嵩山・石巻・西郷・下条の仲間に入っている。



三世代交流風景（お手玉づくり）

最近、市老連の理事会の要請で、年齢別の会員数を調査して組織率を算出した。組織率というのは60歳以上の居住者の中で老人クラブに入会している人の割合のことであるが、賀茂葵会の場合はそれが90.1%となった。他校区について尋ねたところでは50~60%くらいの答えて、賀茂校区の老人は進んで入会しているようである。

葵会のみならず、全ての老人クラブはかなり元気な老人から、体の不自由な方まで実にさまざまな会員より構成されている。とはいえ、どなたも人生の終末の部分を生きていることには大差なく、そのような老人同士が共に楽しめることを見つけ、ともに語り合う機会をみつけてより良い時間を共有しようというのが老人クラブの活動の目標で、賀茂葵会の主な活動に次のようなものがある。

ア 寝たきり老人の慰問 入院・在宅医療を含め、長期間床に伏せたまま生活をする人がいれば、市に報告し市から配布される慰問品を持って訪問して声をかけ、本人や介護者を励ます活動をする。

イ 一声運動 1人暮らしの老人がいると定期的に訪問してお世話をし、近況を尋ねる。

とかくひきこもりになりやすい年寄りの話相手をしにいき、役員の間で相互に情報交換をして、孤立しがちな老人の発見に心がける。

ウ 旅行または茶話会 例年、1日旅行を年2回、一泊2日の旅行も年1回実施し、老人同士の楽しい行事となっている。

エ スポーツ 老人クラブのスポーツといえば、一昔前まではゲートボールに限られていたが、いまはペタンク・グランドゴルフ・バンパーなどの競技も行われている。賀茂校区はグランドゴルフとペタンクが良い成績をあげている。石巻運動公園で行われたシルバースポーツの予選では、グランドゴルフが優勝、ペタンクが準優勝で、ともに中央大会への出場権を確保した。

オ 三世代交流の日 毎年1回、賀茂小学校で三世代交流の日を実施している。小学生やその親達と一緒に竹馬・竹とんぼ・水鉄砲・お手玉を作って遊んだり、ペタンク・グランドゴルフ・ゴム飛び・ドッジビーなどをしている。これらは老人にとって、はるか昔の子供に返るひと時となっている。

カ 交通安全の運動 高齢者の交通事故を1つでも減らそうと、校区市民館で高齢者交通安全巡回教室を実施し、多数の会員が参加している。また交通安全指導員は、定期的に交差点に立ち通行者の安全を見守っている。

キ 一品寄付運動 各家庭を訪問して一品寄付をお願いし、その売上げ収益で福祉施設などに寄付する運動を女性部会が実施している。今年は動物園に車椅子を、福祉センターに健康器具を寄付した。



賀茂葵会への表彰状

賀茂葵会結成（昭和38年）以来のこうした諸活動が評価されて、平成14年（2002）に愛知県老人クラブ連合会から表彰状が、更に翌年2月に市教育委員会から青少年育成賞が授与されている。

第3章 教育と文化

1 寺子屋教育

賀茂小学校の学校沿革史によれば、「明治5年(1872)8月2日学制発布と共に、従来村内の各所、「本願寺」(鶴巻)、竹尾氏(城前)、加藤氏(栗八名)にあった私塾、いわゆる手習子なるものを廃して、学校を設け本願寺を校舎にあて、橋本俊蔵(旧吉田藩士)を教師にした。これが賀茂郷学校のはじめである。」とかかれている。

八名郡誌によると「明治5年4月28日八名郡に郷学校ができる」として、萩平(4月)・乗本(5月)・半原=富岡(7月)・御園=金沢(8月)・日下部=大和(11月)・藤ヶ池=下条(11月)・賀茂(あけて明治6年2月ともいう)の7校があげられている。これは当時の額田県の通達により設立が奨励されてできたとされている。



塾のあった本願寺

なお、寺子屋については、明治6年(1873)寺子屋廃止令の布達により、その大半が廃業した。

賀茂の寺子屋については、豊橋市史(3)に次のような記述もある。

- ・中野肇(農) 嘉永元年～明治5年 書読
- ・加納寺(僧) 安政2年～明治5年 書読、算
- ・大伴千秋(神主) 弘化元年～慶応元年 書読
- ・本願寺(僧) ?～明治6年 書、読・算

2 賀茂小学校

(1) ゆりかごの時代

郷学校が設立されたのも束の間 第6中学校第35番小学賀茂学校が明治6年(1873)6月に設立、同8月には第2大学区第9中学区第70・71小学賀茂学校と学区更正される。

八名郡誌によると「児童数73名、教師橋本俊蔵(校長)茂木知至、本願寺にて学習」とかかれている。

その後、年月は不詳であるが学校沿革史には「校舎狭隘のため、定重の善心寺が住職なく空寺であったため、ここを借用して移る」とかかれている。

善心寺は賀茂町字若宮42(定重地内)にあり、現在は田んぼの中で墓のあるところにあった。曹洞宗妙巖寺の末寺であったが、その後同宗の長全寺へ合併した。この善心寺校舎が存在した年数は定かではない。

明治12年(1879)10月13日には八名郡第25番小学賀茂校と改称された。

学区を廃し、郡単位の学校を定め、町村設置として自由経営にまかせることになった。

義務年限は18か月で小学教科に裁縫を加えて、女子の就学を奨励した。授業料は50銭（明治9年当時、米1俵2円）と高額だったので、愛知県は当分の間、家庭の貧富により3等に分けて徴収した。この地方の授業料は月額上等7銭、中等5銭、下等2銭であった。

明治13年（1880）校舎が狭隘になったため、校地を字宗末（現在保育園のあるところ）に求めて、従来の郷倉庫を改築して校舎とした。これは八名郡における校舎建築の嚆矢、（物事の初め）であった。この校舎は明治34年（1901）に字森信の地（現在地）に移り21年間使用された。

明治15年（1882）11月28日の校名変更で八名郡23学区公立小学賀茂学区となり、初等科3年、中等科3年、高等科2年の修業年限が確立された。就学年令も6才から13才と限られていたが、当分の間は13才以上の者も在籍していたようだ。

（2）基礎が確立した時代

明治19年（1886）4月10日、小学校令が改正されて、尋常小学4年、高等小学4年の8か年教育が確立された。



明治20年代の教科書

明治20年（1887）県令11号により小学校設置区域及び位置の改正が行われて、尋常小学校賀茂学校となった。

このころから理科、兵式体操、唱歌及び道

徳に重きをおくようになり、校訓づくりや、級長をたてるようになった。

明治23年（1890）10月30日には「教育に関する勅語」が發布され、国家体制の精神的支柱として、国民教育の基本理念を明示し、太平洋戦争終結後の昭和21年（1946）10月末まで奉読された。

明治25年（1892）5月24日、八名郡賀茂尋常小学校と改名される。

明治33年（1900）8月勅令334号により、小学校令の改正があり、実業教育に重きをおくこととなり、高等科では・農業・商業・手工の1教科もしくは2教科を加えること。図画・体操・裁縫を必須科目として、女子高等科に家事を加えること。進級試験を廃止して、児童の負担を軽くするようになった。



賀茂小学校旧校舎平面図

明治34年（1901）校舎が更に狭隘となり、字森信（現在地）に校舎を新築して移転した。明治42年（1909）4月1日、八名郡賀茂尋常高等小学校となり、金沢村の高等科生徒を受託するようになった。

明治43年（1910）8月31日には北校舎西半2教室を増築、同45年4月には小学校校庭の一隅に、牟呂用水の生みの親、竹尾彦九郎氏の竹尾君紀功碑が建立された。

(3) 内容が充実した時代

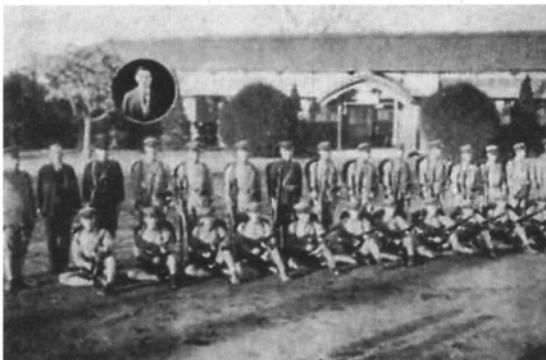
大正3年(1914)から7年(1918)に及ぶ第1次世界大戦の影響をうけて、大正中期は農村も都市も例のない好景気にわいた。しかし、これも長続きせず、異常な物価高騰をまねき、一般生活は困窮を極めた。

この時代の教育は、世界的な傾向として民主主義的な思想がひろまり、地方の教育界までその影響が見られた。個性尊重、画一打破、児童本位の経験主義中心の教育が広がっていった。

三河部の各学校でも積極的に研究授業が行われたり、綴方研究発表会、月刊綴方雑誌発行など自由な教育運動が展開された。図画の学習では従来の臨画方式の授業から、自由な創造的学習をねらう写生に力が注がれるようになり、クレヨンやクレパスの使用が普及した。

理科教育の充実も叫ばれ、児童の手による実験も行われるようになった。その頃であろうか、賀茂小学校の理科室にも多くの標本や、ガラス製の実験器具類が整備されていた。

体育ではスウェーデン体操、デンマーク体操などが紹介され、とび箱・ろくぼく・平行棒・平均台などが、体育の補助器具として利用されるようになった。

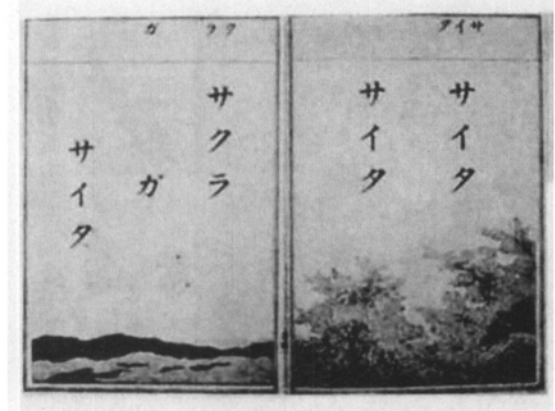


青年訓練所の風景

大正15年(1926)4月には、賀茂青年訓練所が同校に開所された。

(4) 戦時下教育の時代

昭和8年(1933)には国定教科書の改訂があり「サイタ、サイタ、サクラガ、サイタ」と小学国語読本(巻1)は全国統一された。



昭和8年の「小学国語読本巻1」

昭和12年(1937)日華事変が勃発した。

この頃から国民精神の克己、強調が行われて、学校でも訓話や神社参拝、そして出征兵士の見送りなどに参加することが多くなっていった。

昭和16年(1941)4月1日、国民学校令公布により、八名郡賀茂国民学校と改称され、6か年の初等科と2か年の高等科がおかれ「アカイ、アカイ、アサヒ」の第5期国定教科書の使用がはじまった。

そうしてこの年の12月8日、太平洋戦争の開戦により、国中は軍事一色となっていった。昭和18年(1943)頃になると修学旅行は勿論のこと、遠足や運動会、学芸会の行事もしだいに中止となっていった。

高学年や高等科の生徒は、食糧増産のための勤労作業に従事するようになった。

賀茂渡船場の上の河川敷や、百間堤防下の荒地を開墾して、いもや小麦をつくり、いもの蔓づくりには、お宮の森の落葉をかき集めて、カマス(むしろを二つ折にして、細縄でぬい合わせた、わら製の袋で穀類等の入れ物)につめ背負って学校まで運び、中庭に苗床を

つくって育てた。

昭和19年（1944）頃になると、体操の時間には、低学年は行進の訓練、高学年は木刀や袋竹刀、女子はなぎなたを振って武道が行われ、更に高等科の生徒は握り拳大の石を使って、手榴弾^{しゅりゅうだん}投げの訓練もあった。

団体訓練では豊川の河原にテントを張り、宿泊しての軍事教練的なことも行なった。



昭和17年3月尋常科卒業生

昭和20年（1945）に入ると、米軍のB29爆撃機の襲来が激しくなり、児童は空襲警報のサイレンが鳴るたびに急いで帰宅した。坂井の子は帰りの道が遠いので、賀茂神社に待避用の防空壕が造られており利用していた。

このほか供出用の兎の飼育、軍馬のための干草刈り、衣料の原料となるカラムシや桑の木の皮むき、食料用にするイナゴ取り、落穂ひろい等が行われた。

昭和20年（1945）6月沖縄での戦闘が終結する。同年6月19日には豊橋大空襲、同年8月7日の豊川海軍工廠の大爆撃と、戦局は深刻なものとなり、遂に8月15日終戦を迎えるに至った。

（5）教育復興の時代

戦後教育 は昭和20年9月からはじめられたが、満足な授業はできないので、防空壕や畑になっている運動場の復元や食糧増産の勤労作業はしばらく続けられた。

この頃学校における、教科書の墨ぬり作業は全く異例な措置で、おそらく世界教育史上初めてのことではなかろうか。削除墨ぬりを終えた一冊の教科書は、内容の3分の1ぐらいになったものもあった。

子ども達は教科書や地図の中の朝鮮、台湾、樺太^{からふと}（サハリン）など全部黒くぬりつぶし、掛図等も戦争に関係のあったものは、全部焼却させられた。

こうしてGHQ（連合国軍総司令部）→文部省→県内政部教学課→地方事務所→各学校へと、一片の批評も許されることなく、厳しい指令が伝達され、占領下の教育行政が行われた。

昭和22年（1947）4月から、いよいよ6・3制がスタートした。これに伴い学校名が変更され、賀茂村立賀茂小学校となり、従来の高等科は廃止された。

昭和26年4月1日、賀茂村と金沢村が合併して、双和村発足に伴い、双和村立賀茂小学校となる。

給食調理室も新築され、本格的な学校給食がはじまった。

また昔から使われていた振鈴がベルにかわった。

昭和27年（1952）6月25日、はじめてピアノが購入された。

昭和30年（1955）4月1日、豊橋市に合併、豊橋市立賀茂小学校と改名した。（旧双和村は分村解散し、賀茂は豊橋市へ、金沢は宝飯郡一宮町へ合併した。）

昭和33年（1958）10月15日、木造2階建8教室の新教室が新築された。

続いて昭和34年9月4日第2期工事として玄関、家庭科室、応接室、職員室、および保健、放送などの特別室が新設された。

(6) 充実とゆとりの時代

昭和48年（1973）7月26日プール竣工。当日は真夏の陽光のもと校長、児童代表、PTA代表が泳ぎ初めを行い祝った。

昭和51年（1976）2月4日、プールと同様に用地で難航していた体育館が、関係者の理解と努力によって完成した。

昭和54年（1979）2月17日、鉄筋コンクリート3階建校舎が竣工。続いて第2期工事として、鉄筋コンクリート校舎が、昭和56年（1981）2月27日に完成した。



現校舎とほたるの放流

平成4年（1992）4月9日、その頃めっきりが減ってしまったゲンジボタルを復活させようと、幼虫の飼育を行い賀茂しょうぶ園の小川に第1回の放流を行なった。その後も毎年後輩に引き継がれて現在に至っている。

平成8年（1996）9月1日、教育用コンピューターが導入され、コンピューター学習がはじまった。

平成16年（2004）4月16日、豊橋市教育委員会より「新しい教育課程」の研究委嘱を受ける。これは将来の2学期制へのモデル校として指定校となる。

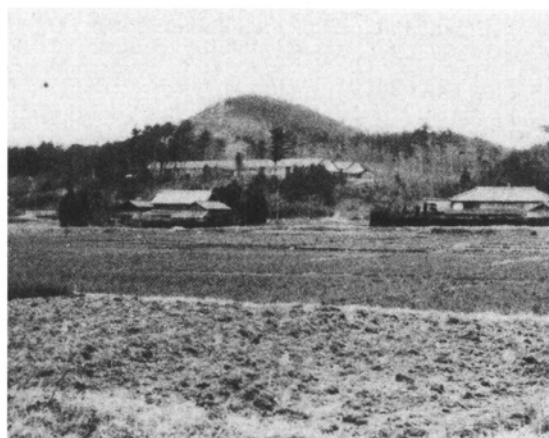
3 双和中学校

昭和24年（1949）9月設立。そして昭和33年（1958）3月31日廃校と、僅か9年余の短命中学校が、賀茂神社の西側の天神平てんじんびらの地（現在の旭精機株式会社の敷地）にあった。

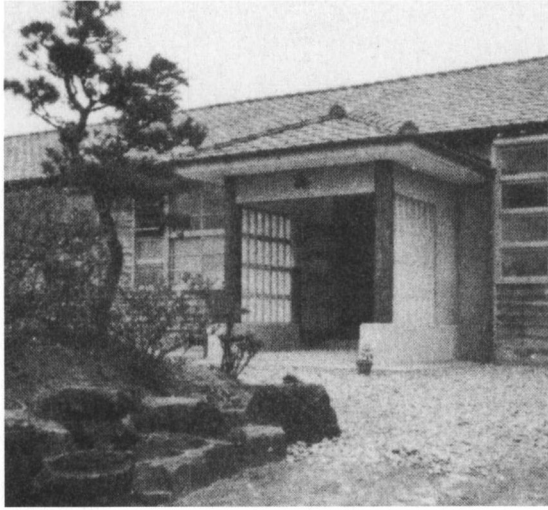
昭和22年（1947）4月、新教育法により（新制中学校の発足）八名郡石巻、賀茂、金沢村学校組合立祥南中学校が設立された。

昭和24年（1949）9月1日、将来的展望のもと、祥南中学校から独立して、八名郡賀茂、金沢村組合立双和中学校を設立、賀茂小学校を仮校舎として使用した。

昭和25（1950）3月1日、双和中学校の校舎竣工（賀茂小学校から移転する）。



双和中学校の遠景



双和中学校の玄関

昭和26年（1951）4月1日、賀茂、金沢村が合併して双和村が誕生、校名も双和村立双和中学校となる。

昭和30年（1955）4月1日、双和村は分村して賀茂は豊橋市へ、金沢は宝飯郡一宮町へ合併した。したがって校名も豊橋市立双和中学校となる。

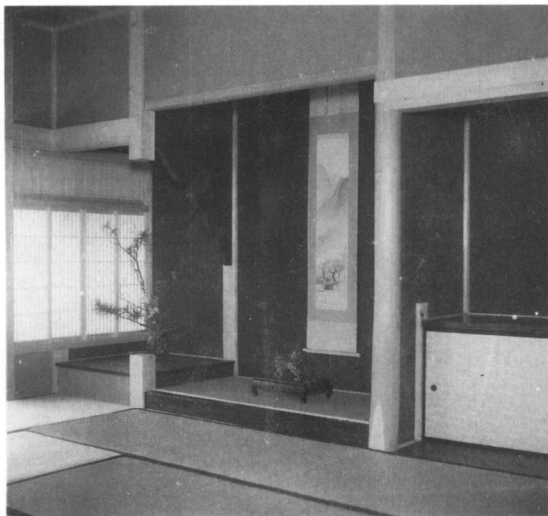
昭和33年（1958）3月31日をもって双和中学校は廃校となり、石巻中学校へ統合となる。卒業生は祥南中学校、双和中学校と合わせて521名（賀茂、金沢分のみ）であった。



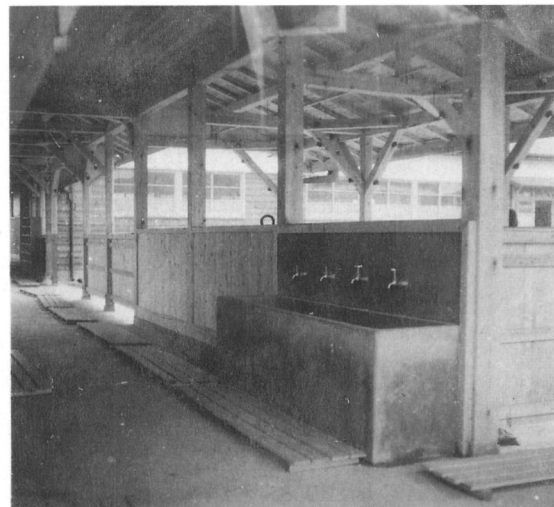
校舎 1



校舎 2



作法室



手洗場

双和中学校校舎（山本秀雄氏提供）

4 賀茂保育園

賀茂の幼児教育が始まって約半世紀が過ぎようとしている。この間、地域住民の熱い願いを受け止めた先生方の努力が積み重ねられてきた。勿論、関係行政当局の適切な指導と、地域関係者の「保育園を育てよう」という熱意が現在の「賀茂保育園」の大きな支えとなっている。

(1) 保育園の建設と改築のあゆみ

昭和29年（1954）4月、旧村役場を改築した待望の園舎ができあがり、木造平屋建て、建物面積357㎡・敷地面積855㎡の立派な賀茂保育園である。6月1日には、愛知県から認可が下り、定員90名（2才未満児10名・2才以上80名）の認可保育園としてスタートした。八名郡双和村立賀茂保育園は、翌年豊橋市に合併され新たな決意で再出発となる。

昭和48年（1973）老朽化した園舎の建て替え工事が行われた。仮園舎は、定重の長全寺となり、保育園は、一時移転することになった。仮住まいの保育園では大変な苦勞を余儀なくされた。

念願の新園舎は、昭和49年3月に完成した。鉄骨平屋建て、建物面積330㎡の広々とした空間で明るい保育室に園児たちは喜んだ。1年間の苦勞から開放された先生方、保護者をはじめ町をあげて新園舎の完成を祝った。

昭和61年（1986）1月には、鉄筋コンクリート造り・鉄骨造りアルミニウム板平屋建て、建物面積180㎡の遊戯室も完成した。平成12年（2000）7月には、新園舎竣工と賀茂保育園の教育環境は、関係各位の粘り強い要請と行政当局の理解の中で、現在にいたっている。

(2) 保育園の内容を深める努力

平成16年度（2004）までの卒園者は、約1,000名で、一人ひとりの小さな命が生まれ、優しさと厳しさと生命力が養われてきた。

昭和49年度（1974）の年間保育計画の「保育目標」の一節には、次のように記されている。

「友だちとのつながりをふかめながら、いろいろな活動を通して自立心を養い、活動範囲を広げてゆく」「集団生活の楽しさをじゅうぶん味わわせ、意欲的な活動とまわりの事物に対する関心をさかんにし、自主協調の態度を養う」

さらに、1年を4期に分け「指導のねらい・留意点」をおさえ、年間行事をくまなく網羅し保育活動に生かしている。月間の教育目標もさらに充実した内容になっている。



保育園の風景

(3) 保育園と家庭・地域を結ぶ努力

園児たちの発達状況や指導記録を綿密に記載した「児童記録票」や「保育日誌」には、給食や間食の様子・出欠状況や健康管理・保育活動の反省など、一人ひとりの園児の状況を的確に把握しながら指導が展開されている。

保育園での生活の様子は、毎月家庭に届く「クラスだより」「かもっこだより」「給食献立一覧表」により、園児一人ひとりの「おたより袋」で結ばれて家庭の子育てに大きな力を与えている。

保育園の活動の様子は、毎月発行される賀茂文化の「保育園だより」で全戸に届けられる。これにより、各月の活動内容と園児たちのいきいきした様子が紹介され、「賀茂小だより」と共に貴重な存在となっている。

父母の会の活動も盛んに展開され、保育士の皆さんと連携を深めながら、保育活動に大きく貢献している。

保育園は、「地域の子育てセンターでもあります、どうぞ気軽に声をかけてください。」と地域に呼びかけている。今や「賀茂保育園」は、地域の「子育てセンター」として地域にどっかりと根ざし、地域の人々に守られながら、さらに大きく飛躍しようとしている。

5 史跡と文化財

(1) 賀茂神社の文化財

① 賀茂神社本殿 (県指定有形文化財)

屋根が^{ひわだ}松皮葺きの本殿は、規模が比較的大きい一間社流造で、細部の手法に照らすと棟札にみられる寛永元年(1624)新造とある際のものと思われる。ただし正面の向拝にみえるカエル股の彫刻に菊の大輪をあしらうなど一部に桃山風の様式をとどめているので、おそらく別の棟札にみえる慶長6年(1601)に造立された時のものと考えられる。

② 猿田彦の古面 (県指定有形文化財)

この古面は、神事に使用されたもので作風は、古調を伝え力を備えた手法を示している。色彩は、剥落しているが頭部の浅い彫法・紐穴が2つある点などを合わせて、室町期に属するものと思われる。

③ 賀茂神社の仮面 (市指定有形文化財)

もとは祭典や行事などに用いられたものらしいが、今はこれらの面を使用する行事や由来などは分かっていない。伎楽面から能面にいたる過渡期の作品として、仮面研究上貴重なものである。仮面には、鬼面・翁面等6面がある(市教育委員会資料より)

(以上カラー写真参照)

(2) 春の例祭に関する神事と行事

賀茂神社の春の例祭(昔は4月14・15日。現在は4月15日に近い土・日曜日)は、毎年盛大に行われている。ここでは、春の例祭の神事と行事を紹介する。

① 爪切神事^{つめきり}

神職が神前につつしんで進み安置された神馬(木造)の前方にたいして、神文を唱えながら爪を切る行事である。唱える神文の意味は「神殿の玉垣の外囲いは、繁茂する森林で、外からよく見えないところがありますので、ここにきて食事をなさって下さい。」と伝えられている。

② 大旗神事

天正元年(1573)野田城の戦いで敗走途中の家康は、賀茂神社の神主茂久の手厚い情けに大変感銘し、天正3年(1575)「大旗」を賀茂神社に奉納した。(カラー写真参照)

春の例祭には、この「大旗」を神木の頂上から掛けたらし祭事を行っている。世に「賀茂の大旗まつり」と呼ばれている所以である。

③ 藤四郎行事

「藤四郎」の名称の起源は、昔「貴船神社」

社家中野石見守の家来であった藤四郎が、この行事創設のさいに初めてこの役を受けたのでこの名がおきたと伝えられている。



躍動の藤四郎鬼

藤四郎は、希望の氏子が抽選で決めている。当てた人は、家族にも内緒にし、もらすものは邪事があると伝えられている。祭礼の日は、鬼装束で行事に従事する。使用する鬼面は、賀茂神社の宝物のひとつである。

④ 獅子舞行事

厳粛で格調の高い勇壮な獅子舞で観衆を魅了する。獅子の頭は、氏子の志願者から抽選で決めており、これをお頭役と呼んでいる。お頭役は大変重い任務が課せられており、祭りの主役である。獅子の頭は、木製品で、縦36cm・横36cmで重圧感があり、貴重な宝物である。



獅子舞の様子

⑤ 競馬行事

祭礼の最後には、神馬が馬場を疾走する。神馬12頭（現在は6頭）が神川でお祓いを受け、乗り子（騎手）は烏帽子に直垂の衣装を身につけ、神殿での儀式に参列し身を清めたあと馬場に登場する。色とりどりの「ぬの引き」をさっと投げ疾走する姿に観衆が沸く、迫力満点の競馬行事である。祭礼の行事が終了すると、神社の宝物殿には競馬行事に使用された籠や鞍が異彩を放っている。

（参考文献 賀茂神社誌）



競馬の様子

(3) 史跡と文化遺産

① 神山古墳（賀茂神社境内） （市指定史跡）

照山丘陵の下に開けた台地の南の端に位置し、直径28m、高さ3.5mの円墳で、賀茂町に残存する古墳は、現在この一基だけである。円墳の東側と南側が、間川の侵蝕を受けて急斜面となっているほかは、ほぼ完全な形をしている。築造されたのは6世紀頃である。

（賀茂神社誌）（カラー写真参照）

② 照山城跡（賀茂町字比丘尼谷）

戦国の時代、牧野氏の分かれ牧野筑意が築城したといわれている。照山城の主目的は、「外敵を見張り、外敵から身を守る」ことを第1義とした戦国時代特有の山城である。背後に照山を背負い、南は13～15mの崖に守ら

れ、東西に池（防御用）を配置していた。

城内には、水深3.6m・直径1.2mの井戸があり、籠城時の貴重な飲料水となった。その井戸に通ずる空堀が約110mあり、城跡の南側は登り坂になっている。幅3.6m～5.4mのU字形の谷底道があり頑強な砦であった。

家康が、天正3年の長篠の戦に参戦の途中、牧野筑意の家に約1ヶ月くらい滞在したとの説もある。この照山城は、牧野筑意1代で終わったといわれているが、戦乱の時代は大変重要な存在であったと思われる。（賀茂文化）

③ 水神様 （賀茂町百間の堤防）

この水神様は、明治37年（1904）7月10日の大洪水に見舞われた時、堤防が決壊し、低い土地では2日間も水が引かず、賀茂の住民たちは困り果てた。その後、何とか堤防を復元し、切れた位置を示す二基の水神様を建立した。切れた堤防の長さは（水神様と水神様の間）約600mにおよび、毎年7月10日には水神様の祭祀をおこない、平安無事を祈願している。（賀茂文化）

6 賀茂輩出の人物

(1) 山本勘助

山本勘助は、明応9年（1500）8月15日八名郡賀茂村（賀茂町）の山本藤七郎光幸の3男として生まれ、幼名を源助といった。祖父は、^{たてわき}帯刀といい賀茂神社の神官であった。勘助は、15歳の正月に牛久保城主牧野氏の家来である当古の住人大林勘左衛門の養子となった。そのため、名を大林勘助貞幸と改めた。（後に牛久保に住む）それから約10年の歳月が流れた。もともと武芸を好む勘助は、多くの武士がするように、武者修業に出ることを思いついた。ある日、勘助は自分の気持ちを父に伝えた。父親は、勘助の胸のうちを読み取り、修業に出ることを許してくれた。

世は戦国の時代であった。諸国の武将はそれぞれ京都に上り、天下を取ろうと機会をねらっていた。また、そのころ武を好み名をあげようと志した男たちは、それぞれ強そうな武将を訪ね、それに仕えて功を立て、重く用いられるように努力したのである。そのためには、腕をみがき勉強しなければならなかった。

当時、このような立派な武士となるための修業をするには、武者修業に出るのが早道と考えられていた。勘助の修業も、各地の剣士の道場を訪問するのが仕事であった。

勘助はまず紀州の高野山に登り、摩利支天堂にこもって武術の上達を祈願した。そして、弘法大師作といわれる1寸3分（4cm）ほどの靈験ある摩利支天尊像を受けた。勘助は、この仏をえりにかけてお守りにし、四国・九州・山陽・山陰の各地を巡遊し、毛利氏や尼子氏に仕えた。勘助の武者修業は10年続き、その間に身に75ヶ所の傷を負ったと伝えられている。

35歳となった勘助は、その年の冬になつかしい牛久保の大林家へもどった。ところが、勘左衛門には男の子が生まれていた。そのため、勘助は勘左衛門と親子の縁を切り、姓を再びもとの山本にもどした。そして今度は、東関東方面に修業にでかけた。勘助は背が低くすが目で、体の各所に負傷していて手足が不自由なうえに、色が黒いというみにくい男であった。そのため、訪問した武将につぎつぎ断られ、結局最後に武田信玄に仕える事となった。

甲斐に出かけるにあたり勘助は、以前から親しくしていろいろ世話になった牛久保の長谷寺ちやうこくじに住む念宗和尚に会いに行った。武士としていつ死ぬかわからぬ自分の命を、仏門に祈りを込めて自ら髪を切り、えりにかけたお守りの摩利支天とともに念宗和尚に託し、

「道鬼入道、道鬼齊」と名乗る事をお願いして甲斐の国を目指して出発した。時に天文14年（1545）の春、勘助は45歳であった。



長谷寺の勘助の墓

勘助と初めて対面した武田信玄は、居並ぶ重臣の前で勘助にたくさんの禄高を与え、さらに自分の名前の一字を与え、以降、勘助晴幸と名乗ることを命じた。（武田信玄は、名を晴信といった。）勘助は、この青年武将のためならば、命を捨ててでも奉公しようと決意を固めた。

勘助は、軍略に秀でていたばかりでなく、記憶力もすぐれ、長い修業と勉強のおかげで、城を築く術も心得ていた。そのため海津城・高遠城・小諸城などを修築したと伝えられている。また、家来を支配するには「慈悲」の心が大切であることを信玄に進言している。こうして勘助は、徐々に信玄の片腕となり、武田軍を率いる24武将の1人となった。

その後、川中島の合戦が12年間も続いた。勘助は、この戦いで何度もすばらしい作戦を立てたが、惜しい事についに戦死をとげた。勘助の戦死を知った念宗和尚は、勘助の遺髪を埋めて墓を建て、ねんごろに供養した。今も、牛久保の長谷寺には、その墓と摩利支尊天が残っている。（出典 初心を貫いて）（勘助の墓は豊橋市賀茂町の本願寺にもある。なお、勘助については種々の異説がある。）

(2) 竹尾彦九郎

竹尾彦九郎は、天保10年（1839）8月10日賀茂村（賀茂町）字城屋敷で、竹尾新五左衛門茂幹の3男として生まれた。両親を早く失ったため、本家の伯父にあたる竹尾茂樹のもとに預けられた。時に11歳であった。それから伯父の命によく従い農耕の手助けをすると共に勉学にはげみ、生家再興の一念をもやし、万延元年（1860）生家にもどり農業に従事した。明治5年（1872）八名郡の副区長となり、つづいて戸長・八名郡書記・愛知県議員などを歴任した。

明治17年、大干ばつによる凶作と村民の疲弊に、彦九郎は灌漑の必要性を説明し、賀茂・金沢・八名井3ヶ村の有力者と用水路の開発を協議した。そして、豊川分水を計画し村民の協力のもとに水源調査、水路の測量、耕地開拓の方法などについて研究を重ねた。明治20年（1887）2月、用水路の開発許可を愛知県に出願し、4月から着工した。八名井（現・新城市）から賀茂の二本杉（賀茂神社前）まで約8kmにおよぶ水路で、工事は難航をきわめた。この地域は、吉祥山のふもとであったから大きな岩をくだいて用水路の敷地にしなければならず、さらに用水路の敷地の買い上げも地権者との争いがあった。また、9月には暴風雨にみまわれ、用水路の堤防は破壊され復旧に多額の費用を必要とした。しかし、彦九郎を中心とする関係者は再工事に取り組んでいった。そして、賀茂用水は完成した。

当時の愛知県令（知事）勝間田稔は、牟呂村に水田を開き、賀茂村の水路と連結させようとしていた。そして、賀茂村の二本杉から牟呂村までの水路を開発することが決まり、明治20年11月から工事が始まった。この工事が完成するまでには、濃尾大地震や大暴風雨などの被害を受け、困難がつきまとった。

特に、明治25年（1892）9月18日の暴風雨

は、賀茂村に深刻な被害をもたらした。用水路の堤防は破壊され、流失家屋も出て、被害の大きさに村民は、復旧に手をつける余裕すらなかった。豊川舟運業者や村民の中には、用水路開発に反対する者も出た。反対する者の中には、蓑笠や竹槍をもって彦九郎たち関係者にせまる人々もいたほどである。彦九郎は同志と結束を固めきびしい情勢を乗り越え、明治32年（1899）にいたって牟呂用水が完成した。

彦九郎は、農業改良運動にも大きな力を発揮した。明治17年7月に報徳社事業（二宮尊徳が唱えた農村改良運動）を広めようと「賀茂報徳社」を設立し、自ら社長となり農業・養蚕業の改良、肥料の製品研究、牛馬耕の普及にと力をつくした。



賀茂小の竹尾君紀功碑

「救世救民」の精神で、常に村民のためにつくした彦九郎も明治40年（1907）7月20日69歳で病死し、大正元年（1912）10月、報徳社員と村民によって「竹尾君紀功碑」が賀茂小学校に建てられた。

（出典 郷土豊橋を築いた先覚者たち）



竹尾彦九郎氏肖像



施工中の牟呂用水
平成18年（2006）



牟呂用水記念の碑

(3) 戸塚環海

戸塚環海は、安政元年（1854）9月15日、賀茂村（賀茂町）で林九一郎の長男として生まれ、名を芳太郎といった。林家は、代々農家であったが、もともと家柄の高い旧家であり芳太郎が生まれた頃は、祖父徳左衛門が庄屋を務めていて裕福であったが、父九一郎が跡をついでからしばらくして、家運は急に衰えていった。

芳太郎は、幼い頃から一宮村の砥鹿神社の神官であった草鹿砥宣先生の門に入り、句読・習字を学び、進んで国学・漢学の教えを受けた。草鹿砥先生は、当時指折りの国学者であったから、明治2年（1869）新政府によって京都二条城内に設けられた皇学所の講官に任ぜられた。当時16歳の芳太郎は、先生のお供をして京都に上り、皇学所に入学した。しかし、不幸にも間もなく先生は京都の宿舎で急死せられた。芳太郎は、やむをえず先生の遺骨を抱いて郷里に帰らねばならなかった。芳太郎は、郷里に帰っても学問の志をすてきれず、宝飯郡小坂井村の本多匡先生の小竹園に漢学を、吉田藩の儒臣小野湖山先生に漢詩の教えを受けたのはこの頃である。

明治5年（1872）5月、芳太郎は、高ぶる向学心を東京に求めた。同郷の出身で政府の役人となっていた大伴直清宅に身を寄せた。やがて、つてを頼って鹿児島県出身の洋学医で、当時兵部省の軍医石神豊民先生の塾僕となって、はじめて医学を修める志をたてた。石神塾で学ぶこと3年。芳太郎の勉学が先生の目にとまり、先生は自分の名から一字を与え、芳太郎は「林豊策」と改名した。医学への志が固まった豊策は、明治7年（1874）海軍医療学舎に入学した。しかし、翌8年恩師豊民先生が亡くなられた。海軍医療学舎では、イギリスのウィリアム・アンデルセン先生について学び、首席で卒業後海軍々医副に任ぜ

られた。

豊民の死によって、それまで海軍病院長の職にあった戸塚文海が軍医寮頭となり、次いで明治9年（1876）の制度改正にともなって海軍医務局長・海軍々医総督となった。豊策の努力と才能は、まもなく文海の目にとまるどころとなり、明治14年（1881）戸塚文海は、戸塚家の将来を考えて林豊策を養子として家業をつがせることにした。豊策は、環海と改名し同年5月に入籍した。

翌明治15年（1882）、イギリスに留学、ロンドンのセント・トーマス病院学校に入学した。ここでも成績優秀でたびたび受賞し、英国医師免許も取得した。次いで、ベルリンのゴッホ教室で細菌学を修めて帰国した。帰国後、ただちに環海は、海軍々医少監に任ぜられた。

明治22年（1889）には、軍艦「浪速」の軍医長。つづいて「高千穂」軍医長。その後、明治33年（1900）より2年間欧米に留学し、各地の病院医学校で新知識の吸収に務めた。明治35年（1902）5月、海軍々医総監に昇進して佐世保鎮守府医務部長兼病院長に任ぜられた。

海軍退役後、環海は東京市街の品川に戸塚外科医院を開設し、多くの患者の治療にあたった。大正14年（1925）嗣子文卿に病院を譲り、大森八景坂に居を移して、悠々自適の生活に入った。環海は、昭和7年（1932）1月31日、東京池袋の地で老衰のため没した。享年79歳。墓地は、東京郊外の多摩墓地にある。（出典 郷土豊橋を築いた先覚者たち）

賀茂校区史関係略年表

和暦	西暦	月	日	こと が ら
	AD 300			権現山古墳できる。
	6世 紀頃			神山古墳造られる。
寿永3	1184	4		京道上賀茂神社社領として三河小野田荘が記録に残る。
建久3	1192	7		源頼朝征夷大將軍となる。
明応9	1500	8	15	山本勘助 賀茂に生まれる。
永禄4	1561	9	10	山本勘助川中島で戦死。
永禄11	1568	12		家康、賀茂神社へ御旗を奉納
天正元	1573	1		家康、野田の合戦に敵に追われ、賀茂神社に隠れ難を免れる。
		6		家康、長篠へ出陣に際し、賀茂神社に御旗料を奉納する。
天正3	1575			家康、賀茂神社に御生祭用大旗を奉納。
慶長6	1601			賀茂村天領となる。
慶長8	1603	2		徳川家康征夷大將軍となる。
				家康、賀茂神社神主竹尾茂家を伏見城に招き百石の朱印状を授与する。
寛文8	1668			賀茂半原領となる。
天保10	1839	8	10	竹尾彦九郎賀茂に生まれる。
安政元	1854	9	15	戸塚環海賀茂に生まれる。
明治4	1871			賀茂半原藩から額田県となる。
明治6	1873	6		賀茂に学校が設立される。
明治12	1879			賀茂、額田県から愛知県となる。
		10	13	八名郡25番小学賀茂学校となる。

明治14	1881	3	1	賀茂郵便局が出来る。
明治17	1884			賀茂大千ばつの被害を受ける。
明治18	1885	6	30	賀茂郵便局廃止。
明治20	1887	7		賀茂用水竣工。
明治21	1888			牟呂用水開通。
明治22	1889	4		市制町村制施行。
		10	31	巡査駐在所が賀茂に設置される。
明治24	1891	10	28	濃尾地方大地震
明治25	1892	5	24	八名郡賀茂尋常小学校と学校名変更。
明治29	1896	11		神野新田完成
明治30	1897			豊川鉄道営業を開始。
明治32	1899			牟呂用水完成。
明治35	1902	5		戸塚環海、初代海軍軍医総監となる。
明治37	1904	7	10	洪水により村上の堤防が切れる。(大暴風雨)
明治40	1907	7	20	竹尾彦九郎氏逝去。 享年69才
明治42	1909	4	1	八名郡賀茂尋常高等小学校と学校名変更、金沢の高等科生受託。
大正4	1915	2		「川添道」が「郡道豊橋街道」に認定される。
大正6	1917			賀茂渡船県営となる。
大正7	1918	10		賀茂に電灯がつく。
大正12	1923	3	31	「郡制」廃止により4月1日から「県道豊橋本郷線」となる。
昭和7	1932	1	31	戸塚環海氏逝去 享年79才
昭和8	1933	3	21	賀茂郵便局新設される。
昭和10	1935	4	1	八名郡賀茂村立賀茂青年学校併置(小学校に)
昭和12	1937	7		日中戦争起こる。

昭和13	1938	4	2	農地調整法施行、戦時の農地統制強化はじまる。
昭和15	1940	4	10	「米穀管理規則」制定、米の国家統制、強まる。
昭和16	1941	4	1	小学校が八名郡賀茂国民学校となる。
		12	8	太平洋戦争始まる。
昭和17	1942	2	21	主要食料品配給制導入、衣料品等総合切符制導入。
昭和20	1945	8	15	日本、連合国に無条件降伏。
昭和21	1946	2	1	第一次農地解放が実施される。
		10	21	第二次農地解放。
		11	3	日本国憲法公布。
昭和22	1947	3	31	賀茂村農地委員会第1回農地買収実施 昭和26年まで13回実施
		4	25	定重の林大作家衆議院議員に当選（社会党）
				賀茂に松井医院開業
昭和26	1951			豊橋と賀茂間バスが通いはじめる。
		4	1	八名郡賀茂村同金沢村が合併し、同郡「双和村」誕生。双和中学校開校
		9		対日平和条約調印
		10		賀茂神社拝殿改築成る。
昭和28	1953	2		テレビ放送開始
昭和29	1954	4		賀茂保育園誕生
昭和30	1955	4	1	八名郡双和村大字賀茂は豊橋市に合併する。 豊橋市立賀茂小学校となる。
				松井医院が小柳津医院と変わる。

昭和33	1958	3	12	猿田彦の古面 県指定有形文化財となる。
			31	双和中学校廃校
		4	16	照山砕石誕生する
		10	15	小学校校舎新築 (木造二階建 8教室)
昭和34	1959	12	18	小学校管理棟新築
昭和36	1961	3	30	賀茂神社本殿が県指定有形文化財となる。
昭和39	1964	10		オリンピック東京大会
昭和40	1965	3	31	賀茂土地改良区設立
		4	1	建設省（当時）間川の改修工事に着手、現在工事継続中
		7	13	豊川放水路竣工。
昭和41	1966	3		「賀茂渡船」廃止
		4		豊川の「賀茂橋」開通。
昭和42	1967	2	17	賀茂神社の仮面 市指定有形文化財となる。(6面)
昭和43	1968			賀茂校区周辺の豊川堤防の改修はじまる。 (同44年まで)
昭和44	1969	5	26	東名高速道路全面開通。
				旭精機賀茂へ進出。
昭和45	1970			賀茂しょうぶ園開園
昭和46	1971			O S G 賀茂で生産開始。
昭和47	1972	7	26	賀茂小学校プール竣工。
昭和48	1973	2	28	J A 店舗A コープ賀茂店開業。
昭和49	1974	3		賀茂保育園新園舎完成。
昭和50	1975	9		土地改良換地処分完了。
昭和51	1976	2	4	小学校体育館竣工。
昭和54	1979	2	17	小学校鉄筋校舎竣工 (第一期)。
		6	1	賀茂校区文化協会誕生。
昭和55	1980	11		三上橋できる。

昭和56	1981	2	27	小学校鉄筋校舎竣工 (第二期)
		3	14	賀茂土地改良区解散公告 出る。
			29	賀茂校区市民館竣工。
昭和58	1983	5	1	賀茂校区スポーツ広場完 成。
昭和61	1986	1		賀茂保育園鉄筋コンクリ ート遊戯室完成。
昭和63	1988	4		東名高速道路チェックパ リア完成。
		8	15	小学校校庭に夜間照明設 備完成。
平成元	1989	3	8	賀茂校区上水道施設事業 完了。
		11	3	賀茂文協創立10周年記念 誌「賀茂神社誌」発行。
平成4	1992	1	31	サークルK賀茂店オープ ン。
		4	9	第一回賀茂ゲンジボタル 放流式実施。
平成6	1994	11	4	賀茂小学校が豊橋市教育 奨励賞受賞。
平成7	1995	8		JOMOガソリンスタン ドオープン。(ライブス ポット賀茂)
平成8	1996	3	28	「賀茂文化」200号記念誌 「生ありて」発行
		9	1	小学校に教育用コンピュ ーター導入、 コンピューター学習開始
平成12	2000	7		賀茂保育園新園舎竣工。
平成13	2001	2	10	青少年健全育成の集いで 「ホタルの飼育活動」が 表彰される。
		6	1	校区自治運営規約制定

平成14	2002	3	20	J A Aコープ賀茂店閉 業
			28	J A 豊橋賀茂支店閉鎖。
平成15	2003			賀茂の水田ブロック別麦 作実施(Aブロック)
平成16	2004	3	1	「賀茂文化」300号記念 誌「昭和時代の賀茂町」 発行。
				小柳津医院閉院
平成16	2004	4	1	賀茂小学校初の女性校長 馬場とき子氏就任。
				賀茂の水田ブロック別 麦作実施(Bブロック)
平成17	2005	8		豊橋市プレイイベント夏 まつり開催
平成18	2006	2	1	宝飯郡一宮町が豊川市と 合併した。
			5~9	賀茂文協が豊橋市100祭ま つり参加。「賀茂1,500年 を語りつぐ」講演会開催 (年4回)
			11	10

参 考 文 献

- 賀茂神社誌
ふるさと豊橋
賀茂小学校創立百周年記念誌
石巻中学校創立35周年記念誌
賀茂文化
昭和時代の賀茂町
八名郡誌（改定版）
とよはしの歴史
豊橋の史跡と文化財
中部の電力のあゆみ
定本「豊川」母なる川その悠久の歴史と文化
母なる豊川 流れの軌跡
豊橋鉄道50年史
豊橋鉄道80年のあゆみ
愛知県農地史
生ありて
豊川用水史
豊川の歴史散歩
写真集 豊橋いまむかし
生きている霞堤
愛知県風土記「風土と文化」
豊橋市史
幼きものに
研削琢磨
躍進
豊橋市タウンマップ
- 賀茂校区文化協会
豊橋社会教育連絡協議会
賀茂小学校
石巻中学校
賀茂校区文化協会
賀茂校区文化協会
八名郡誌領布会
豊橋市
豊橋市教育委員会
中部産業遺産研究会
郷土出版社
建設省豊橋工事事務所
豊橋鉄道
吉川利明
愛知県
賀茂校区文化協会
愛知県
豊川市
郷土出版社
藤田佳久
愛知県教科書特約供給所
豊橋市
白井 覚
OSG
OSG
豊橋市

編 集 後 記

豊橋市制100周年記念事業の基本方針に則り、計画された賀茂校区史が完成しました。私たちは巻頭のあいさつにも書きましたが、本書を気軽に読むことにより、賀茂に愛着が出るように心掛けた次第です。そして賀茂の歩んだ歴史の史実に基づく資料を収集し、市の要望事項に沿って編集しました。

執筆を進めますと、書き留めたいことが多くあり、スペース等の制約から何かエキスを詰めた感じとなりました。

各編集委員は、それぞれ仕事を持ち多忙の中に努力してきましたが、何分にも素人の集まりで不備な点多々あると思います。どうぞこの点をご容赦ください。

皆さんが本書から賀茂をより深く理解され、先人の歩みを将来に継承されるよすがとなればまことに幸いです。

編集者一同

編集委員名簿

稲橋 要	(兼 平成18年度校区総代会長)
岩瀬伸雄	(賀茂校区文協会長)
小林 勝	
中野昌尚	
林 輝雄	
松井廣光	
山本瑳一	(編集委員長)
山本恵三	
坂田 実	(平成16年度校区総代会長)
安藤量次	(平成17年度校区総代会長)

編集協力者

松井修身	(写真担当)
竹尾福治	(とよはし100祭サポーター)

校区のあゆみ 賀茂

平成18年12月25日発行

編 集 賀茂校区総代会
賀茂校区史編集委員会
発 行 豊橋市総代会
印 刷 齋 ぎょうせい

100
古紙配合率100%再生紙を使用しています

PRINTED WITH
SOY INK
Soybean of American Soybean Association



2006年
市制100周年
100th Anniversary Toyohashi City

つながり ひろがる 未来 豊橋